

# 追憶片々

## ——満洲引揚者のインタビュー記録——

語り手：古海建一

編集・解題：大野絢也、佐藤仁史、井田光祝

### 解題

本稿は、満洲帝国総務庁次官古海忠之のご子息であり、株式会社東京銀行常務、ユアサ商事代表取締役会長、社団法人国際善隣協会会長などを歴任した古海建一氏に対して行った3度にわたるインタビューの記録である。古海忠之の事跡については、片倉衷・古海忠之『挫折した理想国——満洲国興亡の真相』（現代ブック社、1967年）、古海忠之『忘れ得ぬ満洲国』（経済往来社、1978年）、古海忠之・城野宏『獄中の人間学——対談』（竹井出版、1982年）などの本人による回想録や、氏の死後に刊行された古海忠之回想録刊行会編『回想古海忠之』（古海忠之回想録刊行会、1984年）など親族や交友関係のあった人々の回想録によって、広く知られるところである。

古海建一氏は、1933年に満洲国新京市にて古海忠之の長男として生まれた。1946年、日本への引揚後、麻布学園中学校、麻布学園高等学校を経て、東京大学

法学部に入学した。1956年、東京大学法学部公法学科卒業後、同年4月に株式会社東京銀行に入行した。同社においては、企画室長、為替資金部長、取締役大阪支店長、常務取締役を歴任した。1988年、ユアサ産業株式会社取締役副社長に就任して以降、同社代表取締役社長、ユアサ商事株式会社代表取締役副会長、代表取締役会長を歴任し、1998年に同職を退任した。引揚者団体との関係では、1991年に社団法人国際善隣協会監事に就任して以来、理事、理事長、会長を歴任し、2013年以降は同会の顧問を務めている。なお、外国為替論の専門家でもあり、1986年度と87年度には京都大学経済学部非常勤講師として外国為替論を講じ、著書に『外国為替入門』（日本経済新聞社、1990年）がある。

筆者と古海氏との交流は、2013年に「満洲の記憶」研究会の活動の一環として関連史料や関係者（特に大同学院）の足跡

を調査していた際に国際善隣協会理事長として応対していただいたことがきっかけで始まった。古海氏のご自宅が研究会の主要な活動の場としている一橋大学と同じく国立市にあることから、折に触れて自宅に伺い様々なご教示を賜っている。古海氏の満洲経験や父の思い出については、「満洲落日（私の終戦体験）」（1948年初稿、2006年最終稿）、「1956年中国渡航記——或る家族の記録」（『東北アジア近現代史研究会会報』15号、2003年所収）、「父の思い出」（前掲『回想古海忠之』）などの手稿類や既発表のエッセイをまとめた『追憶片々』（私家版、2011年）に詳しい。当該書に幼少期に体験した満洲国での生活や満洲からの引揚げについて、当該書に相当詳しく記録されているが、当事者から直接当時の雰囲気などについて伺いたいという動機から、筆者らは古海氏にインタビューを申し出、快諾を得た。若い世代にとって特に得がたい機会であると考えた佐藤は、一橋大学において担当する2019年度「社会史史料講読（アジア）B」の15名の受講生、大学院ゼミナールに所属する2名の博士課程学生とともにお話を伺った。限られた授業時間で伺えなかった質問については、「満洲の記憶」研究会の有志や受講生の有志と共にご自宅に伺い、2度にわたり貴重な話を伺った。インタビューの聞き手、場所、記録整理担当者については、以下の「インタビュー実施状況」を参照されたい。なお、以下のインタビュー記録

は、録音ファイルから文字起こしをした後、古海氏による修正を経て掲載許可を得たものである。文中の表記や表現は基本的に発言時の内容に基づいているが、一部は古海氏の意向により大幅に加筆してあることを断っておきたい。

さて、3回にわたるインタビューにおいて特に印象に残った3点について記しておきたい。第1は、満洲体験の立場性の問題である。夙に指摘されているように、満洲の記憶のあり方は、日本人に限定してもいかなる経緯・立場で満洲に居住していたのか、都市住民（関東州と満洲国）と満洲移民、様々な職業、性別などの属性、引揚げ後の日本社会での適応状況などによって彼らの体験や記憶のあり方は相当異なることに贅言を要しない。しかしながら、植民地統治機構の最中核の地位にあった古海忠之の如き人々については観念的な歴史評価が先行するあまり、その記憶の内実や記憶を取り巻く環境については十分な注意が払われていないばかりか、そうした人々が満洲を語る事が望まれず、またそうした雰囲気を察知して当事者も語ることを憚っていた状況が戦後長らく続いた。かような状況は古海建一氏の語りにも多大な影響を与えたであろう。それが破られるようになったのは、「戦後日本」が終焉したと人々がみなすようになった1990年代以降のことであったと思われる。以上の状況を考えると、満洲国中枢の関係者が当時の状況や心情を自由に語っている点におい

て、本インタビューの意義を認められよう。

第2は、撫順戦犯管理所に収容された父古海忠之へ面会するため、1956年に訪中した古海建一氏の経験である。1950年代における中国の日本人戦犯管理や面会者に対する姿勢・対応がいかなるものであったのかがビビッドに語られている。特に、中国側が古海氏ら面会者に対して瀋陽軍事裁判の録音を聞かせ、徹底的に日本軍国主義への反省を促した姿勢は、当時の中国共産党の日本人に対する扱いとして興味深い。また、戦後間もなく日中国交も無い時期において、戦犯として扱われた父親に面会するため訪中した古海氏が、改めて戦争や中国に対してどのような感情を抱いたのかについても、インタビューからうかがい知れる。

第3に、関係者のみが知りうる事実として興味深かったのが、国防婦人会をめぐる父母の夫婦げんかの下りである。父古海忠之が母古海伸に国防婦人会役員に

就任することを依頼したのに対して、母が断固として拒否し、古海氏が目撃した「唯一」の夫婦喧嘩へと発展してしまった点は戦時下の政策に対する公と私という立場の違いを明確に示している。あくまでも高級官僚としての立場から役員就任を依頼した父に対して、「嫌いなことに責任を持つのは嫌だ」と頑なに拒否した母の立場性は明らかである。その背景には、彼女が「文明開化の人間」であり、満洲国においても「みんな人間平等という信念でいつも接していた」ことがあったという古海氏は評価している。余談であるが、数年間にわたる交流の中で、このような気質が古海氏にも受け継がれているように感じられた。

最後に、3回にわたるインタビューを快諾し、ご自宅に伺うときにはいつも歓待して下さった古海建一氏にはこの場を借りて改めて謝意を伝えたい。また、我々の訪問を優しく見守っていただいた奥方にも御礼を申し上げたい。

## インタビュー実施状況

第1回 2019年6月25日 10時45分～12時45分

語り手：古海建一氏（国際善隣協会顧問）

聞き手：2019年度社会史史料講読（アジア）B受講生（李相眞、山本岳、青木俊輔、佐々木豪、宮川純樹、朝倉希実加、井田光祝、鹿島もも、東郷由佳、中尾柊也、松井沙妃、真次晃央、三浦夏美、吉田裕弥、NGUYEN ANH DUONG）、森巧、辛孟軻、佐藤仁史

場所：一橋大学第2講義棟307教室

記録整理：李相眞、青木俊輔、朝倉希実加、井田光祝、鹿島もも、松井沙妃、真次晃央、三浦夏美、NGUYEN ANH DUONG

第2回 2019年7月20日 16時～17時20分

語り手：古海建一氏

聞き手：「満洲の記憶」研究会（大野絢也、菅野智博、甲賀真広、佐藤仁史）

場所：古海建一氏宅

記録整理：大野絢也、菅野智博、甲賀真広、佐藤仁史

第3回 2019年7月27日 16時～17時40分

語り手：古海建一氏

聞き手：井田光祝、大野絢也、佐藤仁史

場所：古海建一氏宅

記録整理：井田光祝、大野絢也、佐藤仁史

## インタビュー記録

### (1) 満洲の概況

古海：こんにちは、古海です。僕、近くに住んでおまして、さきほど歩いてきました。今日は佐藤先生のご厚意でこういう機会を設けていただきまして、昔の満洲のことについてお話しすることになりました。皆さんが読んでいる『八木日記』がカバーしているのは戦争中くらいからですか。主に戦後ですか。

佐藤：そうですね。1945年の8月頭から1946年の10月までです。

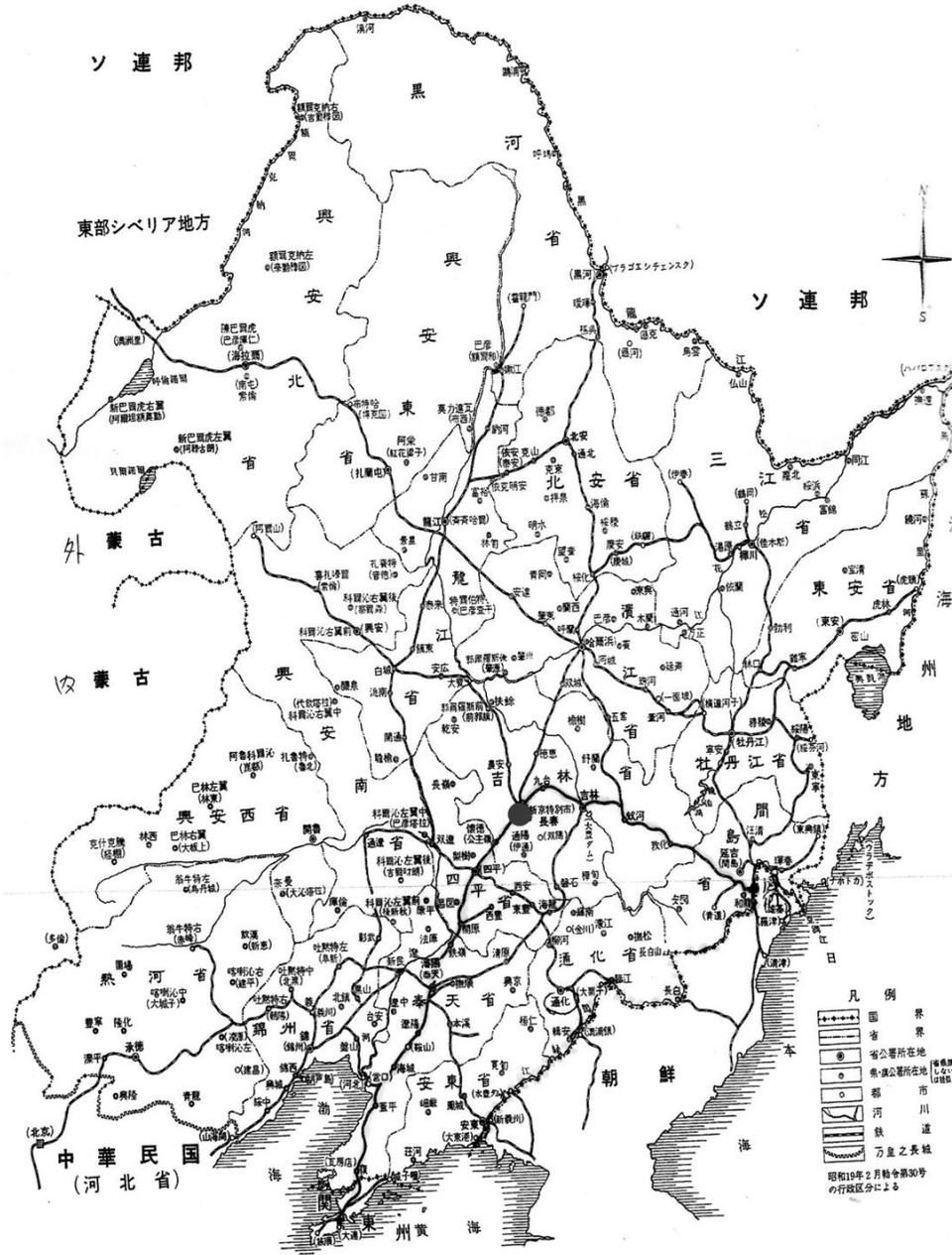
古海：まさに、終戦後の1年間ですね。

佐藤：そうですね。八木聞一は多くの人  
の引揚げを見送っているのです。日記

は引揚げを見送ったところで終わっています。

古海：私は満洲で生まれました。ちょっと日本に帰ってきた時期もありましたけれど、基本的にはずっと満洲にいて、終戦を迎えた時が小学校6年生でした。昭和20年、1945年の8月9日にいきなりソ連の爆撃がありまして、それからすぐ戦車隊が入ってきて満洲は大騒ぎになったわけですが、その時6年生で、学校が直ちにもう閉鎖・閉校になりました。それで、1年ちょっと満洲の新京、今の長春ですね。それから安東、今の丹東という国境の街、その辺で1年間うろろし

ていまして、翌年の9月に日本に帰つてきました。先に、この地図の説明を簡単にしましょう。



地図1 満洲国の全体図

佐藤：お願いします。

古海：満洲の地図、これは満洲時代の地図で、今の地図ではありません。この中で、大きな丸がしてあるのが長春です。上の左の方に興安北省や興安東省があります。省は日本でいう県ですね。それが下に続いていますね。興安南省、興安西省……これはみんなモンゴル人の世界です。ですから、満洲といっても、下の方はちょっと欠けますけど、左半分は蒙古の人たちが住んでいた土地でした。満洲族、漢民族、朝鮮族、日本人が、残りのところ、大体右側に住んでいたのですね。

最後の国勢調査を 1940 年にやっていますけれども、その時の人口が 4320 万人とあってます。ただ非常に難しいのはですね、その国勢調査の手法がどうだったということや、満洲というのは非常に出稼ぎの人が多いところだったのですね。大体寒いですから、農業の場合にはもう 10 月になると、そろそろ凍ってしまうようなところですから。逆に春から夏にかけては無茶苦茶に忙しい、労働力が要る。それで山東省から渤海湾を超えて出稼ぎの人たちが大勢来たわけです。

そういう季節移動の人が非常に多いのでね。この 4300 万というのも果たしてどこまで正確なのか。私が小学校に行っていたころは、戦争中ですから満洲国の国歌を歌ってしまして、そ

れには「人民三千万」としていたのですね。ともかく、1932 年に満洲国ができた時は 3000 万人、それが 8 年で 4300 万人になったということです。1 つは、1940 年にはもう工業化がかなり進んでいますから、出稼ぎの人ばかりではなくて、定着の人も確かに増えていたと思います。それは主として漢民族の人たちですね。それから日本人は少ない。先の 4300 万の中で日本人は 2 パーセントです。朝鮮の人が 3 パーセントですから、当時のカテゴリーでの「日本人」は 5 パーセントです。この左半分の広いところにいたモンゴル人が大雑把に言って全体の 3 パーセントです。91 パーセントがいわゆる中国の人で、そのうち満洲って言いながら満洲族は全体の 6 パーセントぐらいしかなくて、もう当時すでに圧倒的に漢民族の世界です。清朝のころは、満洲族が逆に中国全部を押さえて北京が首府でしたけども、清朝の人たちは満洲族ですね。当時は漢民族や何か満洲に入ってくるのを非常に嫌ってしまして、封禁の地とか言って、長城のこっち側には入れなかったですね。それが 1940 年ごろにもなると圧倒的に漢民族の人口になっていました。今はもっとそうですね。今では 1 億人超していますが、増えたのはやっぱり漢民族です。



写真1 葫蘆島での植樹事業（2013年）

引揚げと関連してよく名前が出るのが葫蘆島です。満洲には3つの大きな港がありました。旅順、営口、それから葫蘆島ですね。この地図みていただくと、一番下の尖ったところが遼東半島で、尖ったところの一番尖ったのが旅順です。その横に大連。旅順が軍港で、大連が商業港でした。それから営口は遼東半島の付け根のところ。営口は、引揚げの時には共産軍が押さえていたものですから、この港は使えませんでした。葫蘆島からは1年ちょっとの間に105万人もが民族の大移動で帰ってきたわけですけど。葫蘆島の下のほうに渤海と書いてありますね。渤海湾。大連のところの右側が黄海で、左側が渤海。この渤海湾の付け根のところには錦州、錦西というような街があって、錦州は大きな街です。葫蘆島は現在、中国軍の海軍の潜水艦の基地になっていますが、大連に対抗して張学良が開いた港なのです。

大連、旅順のところからずっと上の

大きな丸が長春ですね。その真ん中ぐらいに瀋陽（旧奉天）があります。この瀋陽からずっと右下に安東省というのがあって、そっちに鉄道が来ていて、国境のところに安東という街があります。今丹東と言います。これがよくテレビに出てくる中朝国境で、北朝鮮の金主席は飛行機が嫌いで汽車で中国に行くので、ここが映されます。あの鉄橋は昔満鉄が作ったもので、今は新しいのも1つできています。私は、ソ連が攻めてきたときに両親と別れて、安東へ逃げ込みました。逃げ込んだというよりも、逃げたらここへ来てしまったのです。それから奉天、長春、そこから上には哈爾濱があります。これは大きな街ですね。これはもともとロシア人が開いた街で、今でもやっぱり街のつくりはロシア風といったところが残っています。

日露戦争後にロシアから鉄道の営業権を譲り受けた。その満鉄の路線というのが大連から長春までで、満洲国時代はこれを連京線とっていました。奉天から国境の街安東までが安奉線。この2つが満鉄のそもそもの始まりなんですね。それから、長春からずっと右のほうに鉄道線路が出ています。ちょっと上に上がって、それから右へずっと行きますと、北朝鮮との国境に、この地図には書いてない図們という街があります。羅津とか清津とかいうような街の近くです。長春からこ

ここに至る京図線も幹線の1つでした。この沿線は昔から今でも朝鮮族の人たちが住んでいる地域ですね。北朝鮮と中国との間で、この土地が本当はどっちのものなのかという議論があるようです。この京図線と連京線、それと満洲・朝鮮の国境で三角形になりますね。

この三角形は関東軍が最後まで守りたいと欲していたところなんです。その上のほうはずっとソ連と満洲の国境、これは8000キロメートルあります。関東軍も戦争の途中でもうボロボロになっていました。ソ連との戦争はなかったわけですが、南方の戦線などにどんどん関東軍が引き抜かれたものですから、もうとても8000キロメートルの国境線は守れない。それで、ずっと撤退して、連京線と京図線と朝鮮国境との三角形を守る。下のほうに通化という街がありますが、ここを司令部にして、ここで守るということを終戦の年の5月ごろ決めたのかな。しかし、国境地帯にいる開拓団の人たちには知らさないで撤収してしまったのですね。ですから、終戦の前、ソ連が入ってきて開拓団がえらい目にあったというのは、気がついたら関東軍が全然いなかったからだ、開拓団の人と話をすると今でも恨み節が出てきます。終戦の1年ぐらい前からソ連が攻めてくるんじゃないかということは、噂にはよく出ていました。それ

で開拓団も下がり、関東軍も下がったということになると、ソ連軍を呼び込むようなもんだから、関東軍だけ極秘で下がったんだっていうのですけれども、これはあまり理由にならない。しかも悪いことに、関東軍の兵隊の数が足りなくなってしまうと、6月に最後の根こそぎ招集という大動員をかけたのです。それで、開拓団からも4、5万人応召しています。ですから、開拓団全体で27万人ぐらいたんですけど、そのうち4、5万人は最後の最後に働き手が招集でとられたという状態でした。要するに老人と女子供だけになってしまって、見まわしても関東軍は下がっておらず、そこで戦車が来て轢かれた。

実は終戦直前になると参謀本部から電報が来て、三角形も放棄して朝鮮国境を何とか守れということになりました。終戦直前の話ですから、結果的には何もなかったわけですが、そういうことで開拓団の人はたいへん苦しんで、そしてずいぶん亡くなりました。生き延びた人も、南へ東へと逃げてきて、新京や奉天はそういう避難民で溢れました。八木聞一さんの日記にもあると思いますけど、終戦になったらすぐに、関東軍の総司令官、参謀長といった人々は、当然ソ連が来たら拘束されるだろうと。それから満洲国も、総理大臣がいて、総務長官や各省の大臣がいましたが、これも拘束

されるであろうと。政府も関東軍もいきなり消滅して、そこに130万人も民間人が残ってしまう。それをどうするかということで急遽話し合っ、高碓〔達之助〕さんに是非頼むということで、簡単にいうと各地に生まれるであろう日本人会の総会が作られました。これも色々名前変わりましたが、最後のころは全体の日本人会は確か東北日僑善後連絡処といったのでしょうか……。

## (2) 満洲国時代について



写真2

新京白菊在満国民学校でのクラス写真  
(1942年)

佐藤：以下では、先にお送りした質問リストに即して、私たちの方から質問して、それにお答えいただく形で古海さんの満洲国とは何かという問題にお答えいただければと思います。

古海：では1番目から行きますか。

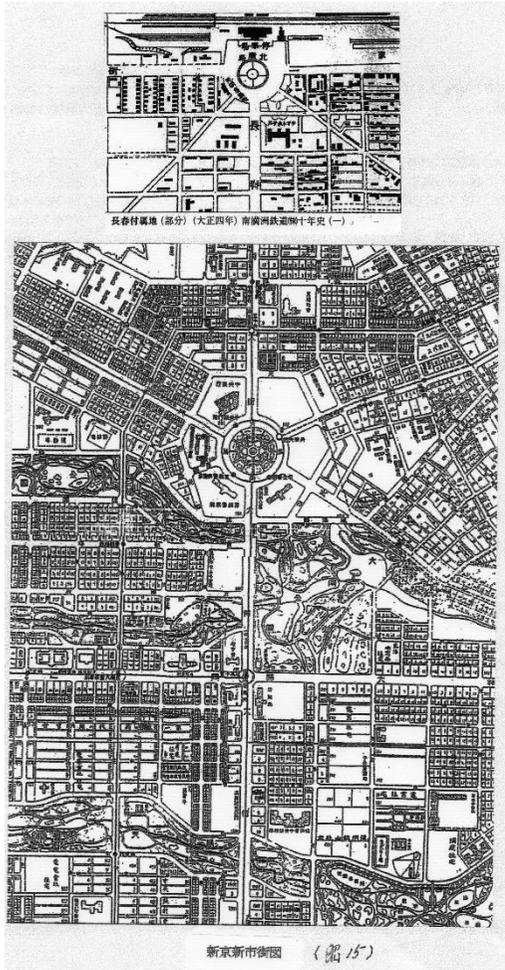
佐藤：古海さんの追憶の本を整理して、簡単な年表みたいなのを作ったんで

すね。最初が満洲国、それから終戦。それから新京の引揚げというふうに分けました。ですので私たちの中では時系列順に話をするのが自然であろうと考えております。それでまず小学校時代についてうかがいます。新京の白菊小学校の方にお通いになっていらしたとのことですが、当時、日本人以外の学生は上下にいらっしゃいましたか。

古海：基本的にはいませんでした。写真(【写真2】)をお渡ししたのですが、真ん中が白菊の3年生の時の写真です。これは全部日本人です。ただし、4年生の時に別のクラスに中国の人、朝鮮の人が数人いました。学年中に学年全体で10人もいなかったかもしれません。ですから基本的にはいなかった。

それでいた人はですね、例えば中国の人なんですけど、仕事の関係ですと日本に住んで、それが満洲にやってきたとかかなり日本との接点が今まで多かった人、かつ日本語が話せる人。満洲の小学校は基本的には、住居地別かつ民族別の小学校です。ですから中国系の方は中国人の小学校に行っていました。朝鮮系の方は朝鮮人の小学校に行っていました。さっき言った通りに90%強は中国人が占めた国ですから、五族協和といっても圧倒的に人数が違います。中国語の授業は週3回くらいあったかな。中国語の勉強

はありましたけど、基本的には中国人はいませんでした。



地図2 新京新市街図

佐藤：ありがとうございました。私が大連からの引揚者に話を聞いた時には、大連二中のそのかたのクラスで一番成績が良かったのは中国人学生であるというお話をうかがったことがありました。大連は関東州時代からの歴史が長い分、そういう人もいたのかも

しれません。

古海：僕は北朝鮮の人を子どものころに知っていたけれども、頭良かったですよ。

宮川：白菊小学校とはどのような学校だったのですか。

古海：当時の新京には小学校が12、3校ありました。入学は地域別でした。地域によって商業地域と住宅地域がありました。私が住んでいたのは住宅地域。いうならば新京がずっと広がって、国がディベロッパーとなって土地造成して、それを買って、家建ててという住宅地域でした。周りは勤め人ばかりみたいところでした。ですからうちみたいな政府役人もいましたし、特殊会社に勤めていた人もいました。関東軍の将校の子どもとかもですね。ですから白菊はレベルが揃ってたみたいで比較的教えやすかったようです。それが特徴の1つになっていたということは一般的に言われてました。

この地図ではですね、日本人が作った長春の街で1915年に作ってるんですね、大正年間。ここに満鉄の長春の駅がありまして、その周りに附属地というのを持ってました。そこは満鉄が行政権を持っていたんですね。満鉄っていうのは鉄道会社ですけども、街を作って、病院を経営したり、小学校作ったり、いろんなことをやっていました。それで当然街も作った。長春というのは元々中国人が10万人くらい

住んでた街で、いうならば小都市ですね。そもそも長春を首府にしたのは、瀋陽は昔の清朝とか張作霖とか色々なしがらみがあって、発達はしているけれども昔のしがらみが強すぎる。それから哈爾濱は北過ぎるし、ロシア人の街だと。それで真ん中の新京は、地理的に真ん中だし、平らだし、それからこれから街を作っていくのに土地が安いと。その3つの理由でここを選んで作りました。

それで、満鉄が大正年間に作った街ですけども。その南側の大きなところ、ここを昭和8年以降、満洲国になってから作ったわけですね。ですからこの間に30年くらい時間が経っていたわけですが、満鉄が作ったシティプランに完全に継ぎ足す格好で南側を作ったのですね。南北に走るのが大体60メートルある道路です。すごく広いです。それからこの広場の端から端までは道路を入れて300メートルあります。誰が作ったかと言うと、後藤新平の指令で作ったのですね。皆さん、これはどこかの地図に似ていると思いませんか。そう、国立の街なんです。国立ができたのは昭和2年、長春の街は大正4年なんかにできていますね。長春の拡張は昭和8年です。

俗説では長春は国立の町作りを参考にしたと言われています。『国立市史』という市の歴史がありますけど、国立の出来があまりによかったから、

そのあと昭和8年に新京を作ったときに、真似をして満洲国のキャピタルを作ったとありますが、間違っています。もうそのときは満鉄の附属地ができていた。後の新京の街はそこから発展させただけなのです。



写真3 国立の大学通り（1956年）

李：私は韓国からきた留学生です。満洲国において朝鮮人や漢人とはどのような関係を持ったか気になりました。そして、彼らに対する認識や差別に対しての話をうかがいたと思います。

古海：正直に言って、僕はよくわかりません。基本的にはあまり接触の機会がなかったです。というのは、さっき言ったように、満洲の発展が早かったものですから、住宅がどんどんできていて。割合似たような職業や人種で固まっていました。だから日本人が新しく日本から転勤してきて、朝鮮の人の住んでいる地域の真ん中に住もうというのはあまりなかった。そういう意味で接触の機会もあまりなかったのですね。それから、もう1つは、朝鮮

の人の場合には日本語達者の人が多かったのですけれども、圧倒的に多い中国の人は今まで満洲でやってたわけだから、日本語なんて分かりませんでした。それで彼の小学校で日本語を教えだして、我々の小学校では中国語を習い込んだんだけど、そんなすぐには話せるわけでもないし。国語やって、数学やって、その他教科をやっていて、なかなか中国語には手が回らなかった。結局は言葉の壁です。私はそれを非常に感じました。接触はどこでしたかという、例えば朝鮮の人が果物やなにかを売る店をやっていると、そこに買いに行く。そうすると朝鮮の人の場合には日本語で通じる確率が高いけども、そうでない場合には、身振り手真似で物を買いましたね。それから、馬車に乗ったら御者は中国人だったとか、その程度の接触でしたね。1つ聞いた話では、朝鮮の人はある意味では苦勞したと思うのですね。というのは、圧倒的に中国人に対して少数民族でした。また当時は日本の一部になっていましたから、そういう意味で俺は日本人だという人もいたし、俺は朝鮮人だという人もいた。中国人はその辺の関係がよくわからないものだから、混乱してトラブルが起きたという話は聞いたことがあります。ただ、私の身の回りには全くそういうのは起きていません。

ですから、人種であいつは何人だか

ら、モンゴル人だからというようなことは、教育上もなかったと思います。そういう教育を受けた覚えは全くない。ただ職業はおのずから得意なところで分かれていたと思いますね。それからロシア人もいました。

ズオン：少し補足として伺いたいことがあります。そうしますと、お住まいというのは、中国人、日本人、朝鮮人、モンゴル人がそれぞれ分かれていたのですか。

古海：そうですね。私が住んでいたのは、さっきの地図であの細かいマッチ箱みたいな住宅街でした。みんな広さは同じ土地でね。満洲の場合には国が地主で、いうなら中国人から買い集めたんですね。ですから、国が地主でディベロッパーでもあった。それから規制かけるのも国なんですね。

ここでまた少し脱線させていただきたいんですけど。満洲は石原莞爾がどうしたとか、皇帝がどうか語られますが、若い人たちには是非別の面からも満洲を見てもらいたいという願いがあります。特に新京です。日本の建築史学者で越沢明という人がいます。ちくま学芸文庫に『満洲国の首都計画』って本があります。いかに苦勞してこの街を作ったかが書かれています。満洲はある意味じゃ1つのショーウインドーだったのですね。殊に新京。日本が出てって何をするかをみんなが見ているとこで立派な街を作る

うというので、色々な人が考えて考えて作った。だから、当時日本でなかったものも沢山盛り込まれているのですね。例えば、当時日本は建築基準法なんてなくて、もう作り放題みたいなところもあったけど、満洲は建築基準法を設けて、住居区域、商業区域、教育区域の線引きをやって、高さ制限などをやった。新京は東洋ではじめて上水道と下水道を分けて、しかも下水道も雨水と汚水とを分けた。分流式っていうんです。ですから、僕たち日本に帰ってきた時、汲み取り式のトイレをみて、なんて日本は不潔なんだろうと思った。引揚者だから金がなくてボロボロで帰ってきたんだけど、えらいところにかえてきたっていう気がしたところもありました。

ズオン：そうしますと、各民族がそれぞれ暮らしていたので、居住地別のアイデンティティとか、エリアのイメージとかも多分あったと思います。例えば、ここは中国人が多いからあまり行かない方がいいとかは言われたりしましたか。

古海：ありますね。満洲国って13年間しかなかったんですけど、私がまだ幼稚園か小学校1年のころ……僕は幼稚園が実は日本だったんだけど、5、6歳ぐらいまでのところでは大体夜外出ではいけない。人さらいが来るよとかね、そんな話がありました。それから、中国や朝鮮の人がどうだこうだ

というのは、私は記憶にないんですけど、中国人は昔の城内に百年も住んでたっていう人たちがいるんですね。そこは行くのは避けてましたね。避けてたっていうのは怖いからっていうよりも、むしろ話を通じなくて帰ってこられなくなるからでしたね。要するに日本語を話す人が少ない地域には行かない方が安全だという気分だったと思います。

戦争がだんだん深くなっていくと、悪い意味で規制が厳しくなりました。警察がいるとか、憲兵が増えるとか、それに従って今度は逆に犯罪が減っていくわけですよ。ですから、私が小学校高学年になったころはどこへ行ったら危ないとか、そんな意識は全くなくて、ずいぶん遠くまで、霞網で小鳥を捕まえに行ったりとか、遠くまで行って帰ってくると真っ暗になっていたりとか、そういうことがしょっちゅうありました。

李：満洲国において名義的な皇帝として溥儀がいたと思うんですけど、日本人は彼のことをどのように認識していましたか。

古海：公式の答えを1つ言えば、知りませんと。小学校6年生ですから、皇帝だろうがなんだろうがよくわからないわけです。ただ、そのあといろんな人の話、これは日本に帰ってきてからとか、うちの父親に聞いたとか、色々な本で読んだとかですけれど、満洲当

時から、彼が非常に人気のあった皇帝だったとは思えない。嫌がられたほどでなかったにせよ、要するにみな彼に対して距離をとっていたのではないかと思います。清朝の廢帝が満洲に来たこと自体が私は大失敗だったと思います。あの人が人間的に問題のあると言われたしたのは戦後の東京裁判からですか。すべて俺は悪くない、みんな悪いのは日本人だとか、悪いのはあいつとかという転嫁があまりに過ぎていると感じました。



写真4 幼少時の父との記念写真  
(1937年)

これに関して、1つ父親から聞いた話があります。満洲国に建国神廟を作ったのですが、それは何かといたら、日本はその時代は天照大神ですからね。それを満洲に持ってきて祀るって話になった。関東軍が嫉けたらしいけ

ど、推進者は皇帝溥儀だったのです。皇帝が日本に来て、日本の天皇に頼んで、天皇は断つたらしい。一旦は断つたのですけれど、結局はできてしまった。皇帝は日本に来て、みんなが天皇を天皇天皇と崇めているのを見て、随分満洲と違ふと。自分もその権威付けにしたい。それで、自分のところにも建国神廟を祀らせろという経緯だったそうです。

満洲国政府ははじめこの話が出たとき棚上げしてしまいました。というのは、満洲では宗教は全く自由にやっていたから。キリスト教もいれば、ラマ教もいる。各民族の宗教はもう充分揃っている、と。それで政府は改めて強く反対したけど、これは皇帝の強い意向だということで、また関東軍も賛成している、ということで結局押し切られてしまった、といます。

とにかく、各民族それぞれ、祭神を祀っているのに天照大神をもって来て、これが一番えらいのだから、皆拝めというのは乱暴だし、五族協和どころではありません。皇帝が推進するなど本来考えられないことです。

一方でね、総理大臣張景恵、この人は評判よかったし、知る人は口を揃えて大物だったと言います。

吉田：満洲の食生活についておうかがいしたいです。敗戦前と敗戦後の食の違いはありましたか。

古海：食生活は、日本と同じで……でも

やはり中国料理系にどうしてもなっていました。戦前・戦中・戦後で変わったことは特になくて、その意味では戦争中の日本に比べて、物資は豊かだったと思います。食糧品が配給だったかどうか……消費組合で主食の割り当てがあったのかもしれませんが、私は覚えていません。

佐藤：日本にお帰りになって食糧事情があまりにも酷いことに驚いたということはありませんか。

古海：ええ、そうですね。父の実家である京都に帰ってきて、ばあさんが1人で心配してて、僕たちがいきなり玄関に立ったら、帰ってきたのかって腰が抜けて、それで歓迎してくれたんですけど、1週間いてあとでわかったのですが、大事にとっておいたお米を我々が1週間で全部食べてしまった。悪い事をしました。それで、京都よりも東京の母の実家に行かないと生活できないことがわかって東京に来ました。帰ってきて食糧事情がわるいことが分かったのです。ただ、日本に帰ったらそんな感じというのは満洲にいたときから聞いてましたしね、ですから逆に言うと満洲でもドツタンボタン逃げ回ったりドブにはまったりなんてやっていたから、危険な感じがなくなるという大プラスがあったから、そりゃそのくらいしょうがないよと思っていました。

### (3) ソ連軍侵攻～安東疎開

井田：ソ連が侵攻してきたという事実は、小学生という立場において、どれほどの危機感を覚えるものでしたか。

古海：私はね、ソ連軍が侵攻してきた時に子供だけは逃げろというので、病気がちで体の弱かった叔母と2人で逃げました。2人で逃げたというのは、当時大混乱だったんですけど、要するに隣組で逃げたっていうのではないし、父が役人やってたけど役所の団体で逃げたってわけでもない。まったく個人ベースで逃げたのです。その時は安東という朝鮮との国境の街まで行って、そこで終戦の詔勅を聞き、思いがけず母と再会し、豆腐の行商をやり、半年後に新京（長春）に戻ったわけですが、この間ずっと緊張の連続だったと思います。

それで戻った長春では別の恐ろしい経験をしました。それは内戦、毛沢東と蔣介石ですね。新京では2度あって、1回は共産軍のほうに逃げて軽く済んだのですが、その前に共産軍が入ってきた時の市街戦は丸4日あったのかな。その際の撃ち合いがひどくてね。数軒先の家は2階家で、最後追い詰められた国府側の兵隊が2階に逃げ込んで、2階と下とで手りゅう弾の投げ合いをやったのです。それで2階の人はみんな死んでしまった。そんなことがありました。まあレンガの家ですから、小銃弾は一応壁に当たれば

跳ね返したけど、終わってから出たら弾痕だらけだったですね。畳全部上げて窓を隠して、布団を全部出して積み上げた中に居て、気をまぎらわすためにトランプなんかしてたんですけどね。トイレには這って行ったのを覚えています。

不思議なことに、その1週間弱の大騒ぎの中でも電気は消えなかったんですよ。それから、終戦から引揚げまでどういうわけか電気はずっとついていました。それからガスはときどきとまったけど、電気はずっとついて、水道は常に出てました。引揚げまでの1年間は満洲国政府も会社もなくなっていましたから、ガス代、水道代、電気代なんて全然払わなかった。そういう会社に勤めてた人だって月給貰えないはずだけど、まじめで責任感の強い人がいて管理していたのでしょうか。それを日本人がやっていたのか、それか中国人や朝鮮人が協力しながらやってたのか分かりません。よくインフラを維持してくれたな。誰がやっていたのかが謎なんです。日本に帰ってきてすぐだったら、やっていた、なんて人の話を聞けたのだろうけれど、今もう全部死んでしまいましたからね。

佐々木：中国戦線や太平洋戦線についての情報は、満洲においてもいわゆる大本営発表のように都合のよい内容であったのでしょうか。

古海：満洲でももちろん都合のいいことばかりで、よく大本営発表を聞いていました。それからもう1つ、子供ながらに覚えていたのはその他のニュースで、どうせ検閲後でしょうけど、「リスボン発同盟」というのがよく流れてきたことです。同盟通信が海外に出ていて、リスボンに特派員がいたのでしょうか。

佐藤：先ほどおっしゃっていたことと重複するのですが、戦況が緊迫する前の満洲での生活に何か不便を感じられましたか。ガソリンなどの配給以外に、食事の配給などに関する経験はなかったですか。

古海：お金を出せば買えたっていう感じ……。もともと生活に必要なものしか買わない生活でしたがね。

佐藤：日本国内みたいに、鉄の物を出せとかそういうのもなかったのですか。

古海：それもなかったと思います。ただ、戦況が深まるにつれて、小学校は国民学校になって、それから、小学生だったけどもゲートル巻いたりしていました。その意味では、楽しさが減ったっていうか、空気として殺風景になってきたというのありました。

そういうことで1つ思い出すのは、まったくプライベートな話なのですが、うちの母は文明開化の人間でしてね。大正リベラリズムの人間で、戦争の時代の空気にはまったく合いませんでした。



写真5 古海建一氏の母（1871年）

佐藤：モダンガールという感じでしょうか。

古海：そうですね。学校は神戸女学院っていうところなのですけど。関西人の気質で、非常に素晴らしい人間でした。さっき、どなたかの質問にありました人種差別があるかについてですが、うちの母はみんな人間平等という信念で、それはそれで立派だったと思うのです。

それから、満洲国には協和会という組織があったのですけれど、国防婦人会っていうのができたのですね。愛国婦人会という名前だったのが国防婦人会になったのかな。父の仕事の関

係でうちの母も何かの役員にさせられそうになってね。母は、絶対に嫌だと言って。うちの両親は私が子供のころから大変仲がいい夫婦だったので。それが、1回だけですけれど大喧嘩やっているのを見たのがそれでね……。

佐藤：国防婦人会ですか……。

古海：母は絶対にならない。親父は頼むからなってくれって。母はそういうのは嫌いだったのですね。役員は関東軍のおえら方の夫人とか……。嫌いな仕事の推進者にはなりたくなかったのでしょう。だけど、隣組について話は別です。若い人たちは今、便利な世の中になって、安全な世の中に住んでいるけど、何が起きるかわからないということも考えてほしい。何か起きた時にやっぱり1番大事なものは近所の人とか、そういう助け合いですよ。あの震災が起きたところではそういうことよく聞くし、まあ、日本人は助け合いをやる方だとは思いますが。整然として行列は組むし、いざというときの日本人はいいなって思っているのです。とにかく、我が家も市街戦で少し壊れたのですけど、その後、接收されましたね。放り出されて、どこ行ったらいいかって困っていたら、隣組の人たちの1軒が、本当に狭い家でしたけど無理して空けてくれて、そこに住ませてもらいました。だから、隣組と一緒に引揚げて帰ってこられたので

すけど、本当に狭かったですよ。向こうには本当に気の毒で……。

佐藤：話が少し戻りますが、お母様がその色々な民族の人に分け隔てなく平等にしないとイケないとお考えになったのは、神戸女学院時代の教育の影響だったのですか。

古海：教育だったと思います。

佐藤：ミッション系の学校だったのですか。

古海：プロテスタントですね。

佐藤：お母様もクリスチャンだったのですか。

古海：そうですね。

佐藤：そういう事情があったのですね。そうすると、お父様も古海さんご自身もクリスチャンですか。

古海：いや、父は違います。母もなんかよくわからないけど、クリスチャンなのだけど般若心経なんかやったり。まあ、宗教的なのですよ。

山本：満洲国で愛国心を育てる教育がそもそもあったのか、それがどのように子供に機能したのかっていうことをお伺いしたいです。また、それが玉音放送を聞いたときに結局どんなことを感じさせることになったのかも教えてください。

古海：愛国心っていうのは、まず、あの当時は教科書を読むと自然に愛国教育になっているわけですね。満洲では実は日本の教科書を使っていました。それと、満洲のいろんなこと、それこ

そ五族協和だとかなんとか含めて『満洲事情』という教科書があって、それから中国語の教科書がありました。この『満洲事情』と中国語の教科書だけが追加で、あとはみんな日本と同じ教科書だったのです。ですから、その意味でも自然とそう〔愛国的に〕なった。



写真6 5年生時の集合写真（1943年）

それから、先生方も戦況が厳しくなるとちょっときつくなってきたところがありました。ただね、それでも日本よりはまだよかったというか甘かったような気がします。たとえば、さっきの集合写真の1年後の、次の4年生の時からは先生が3人になりましたね。担任の先生と、女子師範を出た女性の先生、つまりアシスタント2人がいました。先生のOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング、現任訓練）なのでしょうね。実地訓練のために来たのだらうと思います。

その女性の先生はみんな優しく、みんな好きでしたし、そういう人たち

が、[まわりが]ピリピリしている中でのゆとり的な存在になっていましたね。こう心休まってというようなタイプの先生がいてくれたのは非常に良かったと思います。だから、あの日本並みに〔愛国教育は〕あったけど、少し日本よりはやわらかいところもあったのかもしれない。

佐藤：玉音放送についてはどのようにお感じになりましたか。

古海：玉音放送はね、私は逃げ込んだ安東で聞いたのです。安東駅に着いて、どっかで野宿したのかな。1晩野宿して、2晩目は日本人が集まる大きな旅館に収容されて、そこの大広間で聞いたものだから、わからなかった。声が割れて雑音で分からない。しかも、難しい言葉でね。しかも言いにくいことを言わなきゃいけないものだから、持って回った言い方でね。正直言って何もわからなかったです。後ろの方で聞いていて、そうしたら前にいた大人がみんな泣き出したりしたので、まずこれはえらいことが起きたんだろうなと思いました。その後ももちろん敗けたことを知ったのですが、実はそれよりもショックを受けたのは、玉音放送で集まった時に、誰かが、新京にソ連の戦車が入って市街戦やって、日本人はほとんど死んだと言ったのです。日本人は20万人ぐらい居た訳だから、20万人も死ぬ訳無いんだけど、そんなニュースがまことしやかに出てきた。そ

れで、私は孤児になってしまったと思いましてね、それの方がもう酷いショックだったです。

それから1週間ぐらいして、ぼったり母親に会ったのです。私が逃げた後、8月14日かな。いよいよソ連の戦車も来たというので、父親はもちろん仕事で残ってる訳ですけど、女は逃げろというので、母親は汽車に乗ったら、その汽車がたまたま安東へ来たのです。安東から突き抜けて朝鮮に入って行った汽車もあったのですが、なんかの事情で安東に止まって降ろされたのです。安東に行ったら連絡場所は誰々、京城（今のソウル）だったら誰々というようなことは、父親に言われて決まっていたものですから、私もそこにレポートしてましたし母親もそこへ着いた。母親が安東に来たら、息子さんが来て居るぞというので、母もびっくりして、やってきたのですね。

井田：ソ連軍が侵攻してきた事実は、当時小学生だった古海さんにとって、どれくらいの危機感を覚えるものだったのかを伺いたいです。

古海：危機感があったといえば、まあ小学校6年生なりにあった訳ですけど。ソ連がまず爆撃に来たので、その時は防空壕に入りました。満洲でも防空壕ちゃんと掘っていたのです。新京では全く空襲は無かったのですが、南の方の鞍山という製鉄所の街があって、その街は、2、3回やられたんです

ね。それはソ連にじゃなくて、アメリカのB29、中国の四川省から飛んできたやつが、満洲爆撃に来て、3回ぐらい、かなり被害が出たのですね。8月9日の時は明け方でしたから、父親も一緒に防空壕に入ったのですが、またアメリカが来たんだろうと。今度は爆撃機が新京に来たんだろうなんて言っていました。その後に役所の当直の人から連絡が入って、ソ連が攻めてきたと。父親は慌てて役所へ行って、それからはまあ大騒ぎですね。大人は怖かったというかショックが大きかったと思うんですけど、子どもは、ソ連怖いという理屈はもちろんわかっていたのですが、まあ条件反射的に関東軍がいるから大丈夫だろうとまず思いますよね。そして、身に迫った危険が目の前に出てくるまではね、なかなかピンときませんからね。親は、もう大変だったと思います。それで翌日になって、いよいよ攻めてきたというのが分かって……。

佐藤：8月10日ですか。

古海：8月10日ですね。小学校で夏休み中も朝集まって体操をやってまして、それに行ったら、もうその場で、「学校閉鎖します」と。ですから、怖さというのは、その後に、人の死ぬのを見たり、殴られてるのを見たりしたときですね。僕も安東に居たときに、天秤棒をかついで豆腐売ってましたらね。何回か、2度かな、いじめに遭いまし

てね。どの国の人とは言わないけれども、売り上げ全部取られて、殴られて、がちゃがちゃとかき混ぜられて、豆腐みんな毀されたことが2度ほどありました。大人は随分やられていましたね。

八路軍と言っていた共産軍は、最終的には全国統一して、1949年に国を作った訳ですけども、それまでは私たちは八路軍と言っていましたね。戦犯裁判で死刑を1人も出さなかったと言うのは事実だけど、終戦後のどさくさの中では、特に地方では人民裁判というのが横行しました。あれは裁判とはいうけれど、ただ縛って連れてきて、段の上に乗せて、「こいつはあれやった、こんなことやった、あんなことやった」と一方的に言われて、さあどうするかといったら、みんな周りの連中が「殺せ殺せ」と言うに決まって、「そんなら殺そう」というのでドンとやる。それで死んだ人が多かったのです。安東でも、私たちもお世話になった後藤さんという市長さんは結局それで殺されてしまった。もう思い出したくない酷い話がいっぱいあります。そんなの見てると、子どももとっても怖く感じましたが、一般的には大人の方が、恐怖を感じていたことでしょう。子どもは子どもで、結構近所の子と一緒に遊んだりしていましたから、明るかった面もあります。

東郷：敗戦前普通に満洲で暮らしている

時と、敗戦して略奪を受けたりした後で、中国人に対する感情は変わりましたか。引揚後に、中国人留学生を引き受けたりしていらっしゃると思うんですけども、それぞれの時期において中国人に対する感情はどのように異なりましたか。

古海：さきほども少し触れましたけど、中国人だからという感情はなかったですね。中国人だからというよりもね、張さんだから、何とかさんだから、とかねと思ったりすることはあったけど、それは日本人相手だって同じですよ。僕はね、満洲での体験でつくづく思ったのは、日本人・中国人も併せてだけれど、極限状態になるとね、あるいはその一歩手前、二歩手前でも、悪い奴は悪いのが出て来るのですね。人間というのはいやしいというか、けしからんというか、残酷なものだとか、そういうのを子供のうちに見てしまった感じがします。それから、人を助けようとして自分が死んでしまった人のことを聞いたし、私たちが路頭に迷いかけていたら、うちへどうぞとか言ってくれた人もいました。人間というのは素晴らしいということも随分また見た。それが日本人だったり、中国人だったりする。まあ、概しては日本人社会に居ましたから、日本人なだけけれども、人種の問題より人間の問題だっていうことが、あの時の経験の残りみたいになっている感じです。

僕は学校を出てから銀行で働いて、イギリスに結構長く居たのですよ。全部で合わせると、7、8年になるかな。はじめに行ったときは1961年だったから、日本人には〔部屋を〕貸さないとかそんな時代ですよ。下宿借りに行く日本人お断りとか、そこでやっぱり人種問題を感じたのですね。そこで感じたことと満洲での体験とが一緒になって、ただ人種だけで〔レットルを〕べたっと貼っちゃうのはよろしくないというのがよく分かっています。やっぱり世の中、良い人いっぱい居るし、悪い奴も結構居るしね。日本人は概してぼーっとしているけれど（笑）。そんなことだから、中国人だからどうこうというのは全くない。僕は中国の人には、あるいはイギリスの人には、親しみを感じていますね。基本的には。

#### (4) 新京からの引揚げ

佐藤：以下では、新京からの引揚げについてお伺いしたいと思います。

三浦：先ほどのお話で大分お聞かせ頂いたのですが、敗戦後の引揚げで、収奪や市街戦などで厳しい状況でいらっしゃって、その時に、どのような心情だったのかとか、その具体的な内容をお聞かせいただければと思います。先程のお話を聞いて、なんで古海さんは上手く逃げられたのでしょうか。

古海：ははは（笑）。上手く逃げたという気は全くしません。流れの中で運が良か

っただけです。戦後の長春での、先程お話した市街戦、酷い方のやつね。国府軍と共産軍との間の〔市街戦で〕、日本人で巻き添えになって死んだのは300人いるんです。

佐藤:それはチャーズ（卡子）ですか。

古海:いや、チャーズの前です。長春では、終戦直後はまずソ連軍が入ってきて、それから今度は国府軍が入ってきて、国府軍というか蒋介石の軍隊ですね。軍隊は入らないで責任者だけ入ってきました。ヤルタ会談・協定、ポツダム宣言、みんな中国を代表するのは国民政府ですから。ソ連軍もそれは分かっているから、中国国民政府に満洲を引き渡さなければいけない。当初、全体を抑えたのはソ連軍でした。中国・国府がそれを受け取りに来た。もともとだったらソ連軍は3カ月で撤退する約束になっていたけれど機械や設備の持ち帰りに時間がかかったので居座っていました。大分長くなっちゃった。それで、国府軍は東北行営という組織だけ入ってきたのですね。だけど、兵隊は居ない。そこで、旧満洲国軍というのが居たのです。満洲国軍というのは関東軍とは別の満洲国の軍隊でした。そこに日本人の将校なんかも居た。それで、その満洲国軍が日本人を追い出して、国府軍に就いたのですね。ソ連軍の撤退に乗じて攻め込んできたのが共産軍で、1週間くらい激しい市街戦をやっていました。それで、〔長春

は〕激戦のあと共産軍に抑えられてしまっ

は] 激戦のあと共産軍に抑えられてしまっ  
た。そのあとはしばらくしたら、本物の国府軍がやって来たのですね。で、それ見たとき、僕は驚いた。とにかく綺麗なのですよ。だってね、ソ連軍の、あのでっかくて汚い戦車ばかり見ていたものだから、国府軍の戦車というのは、ピカピカなのですね。それから、みんなピカピカのヘルメット被って、立派な自動小銃持って、素晴らしいのが来た。それが山海関の辺りに上陸してきて、中国共産党軍と戦争しながら長春まで北上して来たのです。この時の共産軍は戦うのは不利との判断で、あつという間に姿を消してしまった。それで僕たちはその国府軍が新京などを押さえていた時期に帰ってきたんです。その後、今度は中国共産軍があっちこっちで力をつけて、新京を大包围しました。1948年かな。チャーズが設けられて、その時は本当に電気も止められて。それで長春に閉じ込められた人たちは大量の餓死者を出しました。ネズミまで食ったというんだけれど。気の毒なことに日本人も若干残っていて、えーと、遠藤……。

佐藤:遠藤誉ですよ。チャーズの本を出していますよね。

古海:そう。チャーズにやられた人に比べると、我々は本当に運の良い時に引揚げた。

佐藤:本当にそうですね。

鹿島：ソ連兵や中国の人々による略奪があったことが手記の中に書いていらっしやっと思うんですけど、ソ連兵は武器も持っていて、略奪というのかなりが恐ろしいものだったのではないかと想像しました。精神的に追い込まれることはなかったですか。

古海：もう、しょうがないですからね、そういう所で生きてる訳だから、それに対処することを考えて暮らすよりしょうがない。だから、ものごとに過敏になるし、運動神経も過敏になるし。いつ踏み込まれるか分からないから、寝る時は洋服を枕元に置いて、しかも着やすいように、順番にたたんでとか、そんなのはみんなやってました。安東でもそうだったし、新京でもやってた。戦争というのはいかんですね。みんなキチガイになってしまうのですよね。日本軍だって、南京だとかそれ以外にも、随分嫌な話がありますけども。満洲でもあまりに酷いものだから、ソ連は囚人部隊を満洲に送りこんできたんだという話が実しやかにありました。みんなソ連兵は入れ墨なんかしてましたしね。ところが、そうではなくて、あれはまともなソ連軍だったのですね。ただ彼らのうちの多くが、実際ベルリンまで攻めて行って、ドイツ軍と激戦をやってきたのですね。それでドイツが降伏して、それから、3カ月、4カ月して、こっちまで来たのです。ですからまだ非常に気が立ってたん

でしょうね。規律のない軍隊でしたから、何をされるか分からない。外に出る時は大人は必要な金しか持たない。お金を持ってたら取られてしまう。それから金がなくても殺されてしまいますから、いや殺されたら困るから取られてもいい程度の金だけを持ってね。

満洲でも一番神経使ったのは女性ですよ。みんな髪切って坊主にしたり、男装にしたりしてね。どんどんって扉を開いてソ連兵が、まあ中国人の時もあるけど、押し込んでくるとすぐ押入れの中に隠れろとか、それからあの畳1枚上げて畳の下に逃げ込めとかやっていた。それから街でソ連の兵隊見ると、無知というか腕時計をいっぱい巻いているのですね。俺はこれだけ持っているが無邪気に喜んでいるのですね。当時はすべて巻き時計でしたけど、巻くことを知らなかったり、馬鹿力で巻き切ったり、それで動かなくなると捨ててしまったそうです。聞いた話ですけど。ほんと怖かったですね。そういう点では。終戦の翌年2月の中旬ですが、母と叔母と3人で安東から長春に帰ってきたら、家の半分にソ連の将校2人が住んでいました。残り半分に叔母の連れ合いと若い書生さんが残って住んでいました。1つの家で分かれて住んでいたところに僕たち帰ってきた。家に入っていたソ連将校は少佐と中尉だったかな。これが乱暴はし

ない男たちでね。まあ大丈夫だろうというので、私たちも家に戻ったのです。

それである冬の残りを越したんだけどね。長春は寒いでしょう、長春でも零下 20 度には簡単になりますから。だから北満から来た避難民なんかは大変でした。私が通っていた白菊小学校などにみんな集団で住んでいたのです。その後、彼等が引揚げたあとの白菊小学校に行ったら、外側はレンガだから変わらないのですが、廊下の板は盛大に全部剥がされて燃料になっていました。

それに比べるとわが家は、ロシア将校が石炭を充分持ち込んで来るので凍えずに済んだ訳です。また或る日は電球が切れて、替えを出せというので、替えなんかないというので、ちょっと待ってろとってピストル持って出て行きました。しばらくすると、あつかいのを持って帰ってきた。どこかの家へ押し入って、奪ってきたのでしょうね。我が家は逆にソ連の将校が住んでたから、そういう押し込みには遭わずに済みました。そういう生活で、彼らが撤収するまで 1 ヶ月半ほど一緒にいましたけどね。最後にはガッチリやられました。将校 2 人は「荷物はあとから取りに来させるから」と握手して出て行ったのですが、その後でっかいトラックと兵隊が数人来て、わが家の家具家財はあらかた強奪されました。

朝倉：先ほどのお話の中でも結構言及なさっていましたが、敗戦後の治安や経済状況はどうであったのかを伺いたいです。

古海：治安はもうお話ししたので、もう 1 つのお金の話をします。発券銀行であった満洲中央銀行は潰れたわけですね。国が潰れたから中央銀行も潰れました。では、みんなどういってお金で商売していたのかというと、それでも満洲中央銀行券が実は一番信用があったのですよ。変な話なのですけどね。ほかに何があったかと言ったら、汪兆銘政府の中央銀行が儲備銀行と言って、そこが出していた儲備券も入ってきて流通していました。それから朝鮮銀行券という、これまた潰れたはずの朝鮮銀行が発行していたお金も流通していました。加えて、昔むかし満洲が出来た時に張作霖が使っていたお金は全部変えたはずなのだけど、まだ少し残っているのがあったと見えて、古くさいね、江戸時代の日本の藩札みたいなやつね、あれも見たことがあります。それから何よりソ連軍が出した真っ赤な軍票ね。満洲で駐留していると駐留経費、例えば米を買うといったら金を払わなければならない。金はないし、機関銃を持って行って掠奪するわけにはいかないから軍票を刷るわけ。それを盛大にやったものだから大インフレになっちゃったのですね。それで結局、軍票と満洲中央銀行券、あ

と何種類かの紙幣の中でどれが一番人気あったかという、満洲中央銀行券なのですね。

それで、ソ連がだんだん撤退して行ったわけです。そして満洲のいろんな機械設備などを戦利品と称して、汽車に載せてソ連に送ったのです。兵隊も帰った。満洲の南の方からソ連軍がいなくなっていくわけですね。ソ連がいなくなるとすぐ軍票は減価してゆきます。例えば100円の軍票が、ソ連がいなくなったらもう50円になってしまうわけです。しかも、いなくなるよ、と噂が立った時からもう落ちはじめるのね。でも、中国人というのはすごいですよ。南の方でソ連がいなくなるでしょ、すると軍票の価値が下落するわけ。100円のものが50円になる。それをね、例えば満洲中央銀行券でどんどん買うわけですよ。〔ソ連軍軍票の買い値を〕安くね。それをリュックに詰めて汽車に乗って北へ行くわけです。北へ行ってこの軍票で買い物するわけね。満洲の北の方には、まだソ連軍がいますから、軍票は100円の価値を維持しているわけ。〔ソ連軍の力を背景にした〕強制流通力がある。それで、〔目ざとい中国人は〕大儲けするわけです。為替相場が南の大連や瀋陽の方と、ソ連軍がまだいるハルビンとで異なることが儲けを生む。

これは、それから10年ほど経って、私は東京銀行って言う外国為替専門

銀行に就職して、為替業務をずっとやったからわかるのですが、為替の原理なのですね。僕が新入社員の時に教わった為替取引の原理の1つが、異なる地域で異なる為替市場が建っていたら、片方でも買ってもう片方で売る。これを「裁定取引」といいます。私はすぐ「それなら知っている。満洲で中国人がやっていた」と気が付きました。今のように世界中がコンピューターで繋がっているようになっては大きな儲けは得られませんが……。

もう1つ、軍票に関連して、占領軍が引き起こしたインフレーションのことを話したいと思います。満洲では戦後インフレが激化しました。それは戦争で生活必需品の生産や輸入が滞ったからですが、加えてソ連の軍票がインフレを加速させたからです。何がいくらであったのかというのは全然記憶にありません。しかしながら、ソ連の軍票で大変なインフレになったのは事実です。家財道具を売ったりし、もう売る道具も無い世帯では、知恵をしぼって何かを売ったり、みんな生きるのに必死でした。

ところで、これは歴史上の事実ですが占領軍により現地の経済が破壊されるというテーマで考えると、太平洋戦争中の日本軍にも数々の前科があります。私がギルティコンシャスを感じているのは日本の軍票なのですね。日本軍は南方や中国へ行って、軍

票をどんどん出しました。あるいは現地の金融機関からお金を借りました。日本の国内ではもう軍は金を調達できなかつたのですね。というのは、日本の国家予算の中での軍事費の比率が高くなり過ぎて、もう国債発行もやり難くなった。もうそれでは、国債は洪水状態になっている。つまり国内では戦費が調達できなくなつた。それで、占領地でも金がないものだから、現地調達と称して軍票を出して買う。それから南方開発金庫を作って、そこから金を借りていろいろなものを買う。中国でも汪兆銘政権の儲備銀行から金を借りて必要物資を買う。こういう金は受け取っても外には通用しないから、どこも大インフレになつたのですね。一番ひどかつたのがどこだつたか、フィリピンだつたかな。戦争が始まつた年と、それから途中の昭和19年くらいの比較ですけれど、フィリピンやマレーシアなんかでは、もう万の桁のインフレでした。今のベネズエラみたいなものですね。日本軍が侵略したとか、殺したとかいうような話はでてくるけれど、軍票や、あるいはその現地借入れによって、資材を調達した、収奪したということはあんまり注目されてない。経済面に關心のある人だったら、それも戦争の1つの面だつたということは研究する値打ちがあると思うのですよ。

佐藤：一橋大学の図書館に軍配組合とい

う、まさに軍票を発行していた組織の史料があるのです。段ボール200箱くらいあります。関係者から寄贈されたと聞きました。これを分析すれば、先ほどの古海さんのお話になつたようなこともわかると思います。

古海：私がいた東京銀行は、もともと横浜正金銀行という銀行だつたのですね。ですから、外地のそういった問題に絡んでいたので。それで戦後、軍票をもっているけれど換えられるか、という人がよく来たそうです。そこで、別に会社が1つあって、昔の業務の清算をやつていたので。その会社が軍票の対応もしました。まあ、他の仕事もやらせていましたけれどもね。そこでの対応も軍票は払えないと、全部断つていたのですけれど。この根拠は、サンフランシスコ講和条約で日本の戦時債務はチャラということになつていたので。もう1つ、日本には軍票を払えという国内法がありません、という論拠でした。

松井：敗戦後、中国人の妻となることで中国において生存を謀つた方々がいたと思うのですけれど、お知り合いにそのような方はいらっしゃいますか。

古海：いや、私の近辺や知っている範囲ではいません。残留孤児、残留婦人……。残留婦人というのは、その中国人の嫁さんになつたそういう話です。私は実は親父に会いに興安丸って船でまた中国に行ったのだけれども、

その時に興安丸の帰路に乗って帰ってきたのが残留婦人でした。結構多かったのですよ。ただ、当時日本から北朝鮮に帰りたいという人たちがいた。北朝鮮は素晴らしい国になっているから帰れというので、ずいぶん希望者が帰っていったでしょう。ああいう流れですよ。



写真7 興安丸

ただ、残留孤児問題については、私が理事などを務めていた社団法人〔国際善隣協会〕もね、残留孤児の親探しにはじめのころから絡んでいました。その時期帰国した孤児たちが、さまざまな理由から状況の改善を求めて、国に対して全国で訴訟を起こしたのですね。訴訟団の全国組織も〔国際善隣協会の持つ〕ビルの中に事務所を置いて、協会も訴訟の支援団体になっていました。いつだったかもうずいぶん昔の話ですけど、桐朋学園で会合があったような記憶があります。残留孤児問題にはそのようなことでしたが、残留婦人の問題にまでは、これまでご縁

が無かったというか、手がまわりませんでした。

善隣協会というのは満洲と関わりの深い社団法人だったのですけれど、今や満洲帰りの人は本当に少なくなってしましましてね。満洲で生まれたという人はまだいるけれど、満洲の記憶がある人が本当にいなくなりました。善隣協会で『満洲国史』とか『満蒙終戦史』とかいくつか本を出して、記録を残したという意味で、本当にいい仕事をやってくれたと思っています。私の仲間も多くが壊れたり死んだり……。まあ、あと数年で記憶のある人はなくなる訳ですね。150万人も日本民間人がいて、60、70万人もの日本軍が駐留して、いろいろな面で日本と関わりの深かったところですけども、今日本史のなかに満洲は全くはいつてこないのですね。

例えばある日本史のテキストのなかに満洲というのはどれくらい書いてあったかと言ったら2頁ですよ。ですからね、これはいかにも寂しいと。

〔満洲は扱いとして〕日本とは国が違っていますから、日本国ではないのですよね。一体その日本国の歴史の中で、満洲とか、あるいはまた朝鮮・台湾もそうですけれども、一時期関係があったり迷惑をかけたり、あるいは一緒に何かやったりした地域はどう位置付ければよいのでしょうか。「外史」という位置付けはあるのでしょうか。いよ

いよもってきて時代が移って、いまや関係者はいなくなり、あの時期は「記憶」から「記録」に移った、と言われます。ですから若い研究者の人たちがね、是非これからも色々追っかけて資料をまとめ、満洲国の歴史研究に厚みを加えていただきたい、というのが私としてのお願いなのです。

#### (5) 日本への引揚げ

佐藤：次に、引揚げについての質問をします。引揚船に乗って日本に引揚げきて、日本を見た時にどのような思いがありましたか。

古海：いくつか記憶に残っています。順不同で言いますと、1つはね、広島を見てしまったことです。佐世保に上がった後のことです。終戦翌年の10月ですから原爆から1年少し経っていました。極めてショック受けて、今でも印象強烈です。当時、国鉄の広島駅は少し高い所にあつたのですかね。そこから見るともう一面何も無い。それで、バラックがいくつかひよろつと建っていました。あれは印象強烈で、戦争とは大変なものだと改めて思ったのですね。満洲でドタバタやっていた時の大変さとは異質のね。1発の爆弾で都市がなくなったっていう。あれは本当に強烈な印象でした。日本の印象の少し特殊な部分ですけど。

佐世保に上がった時は、南風崎（はえのさき）、針尾島というところに上

がったのですが、2、3日手続きでいて、それからみんな切符もらってそれぞれ故郷へ帰ってったわけです。針尾島は島とはいうけれど、たぶん葫蘆島と同じで岬だと思います。完全な島ではなかったのではないかな。それで、その時の印象ってのはね。日本とはなんて緑が多いんだろうと。これはやはり強烈な印象だったですね。今と違って当時の葫蘆島はものすごく殺風景なところだった記憶がありますので、日本はほんとに緑が多かった。ついでに言うと針尾島は海軍の施設だったらしいです。江田島の海軍兵学校が空襲やなんかでやられて、戦争がひどくなってきて海軍の士官養成も即製でどんどんやらなければいけないというので、分校を針尾島に造ったのです。あの沖に本船が泊まっていて、小さな湾ですよ。ですから、引揚げ船のLSTは当然入れなくて、沖から、小舟で往復して上陸したのですけどね。沖で何日かいたのは、検疫の関係ですね。変な病気の人がいらないかどうかをね。で、あの針尾島に上がって手続して、2、3日、そこで泊まった記憶ありますけど。そこはだから元海軍の兵学校。言うなれば第2兵学校ですね。その建物が、引揚げ施設になっていました。それから、そのとき聞いて印象に残ったのは古くて高い電波塔がありましたね。日露戦争の時に、バルチック艦隊がどのルートで日本海へ来るか、という話で、

[当時の日本海軍は] えらく悩んでいたわけですね。そして、対馬海峡から日本海の方へ入ってきたわけです。一番はじめに信濃丸っていう船が見つけて、敵艦見ゆって打電したのがね。それを受けたのが針尾送信所施設の電波塔だという話を聞きました。

佐藤：少し戻ってしまのですが、先ほどお話にあった、広島駅から広島の状況が見えたということですけども、原爆のあとで一面焼け焦げていたのですか。

古海：焼け焦げというよりは、ただもう一面の平たい平地。ええ、平地がもうなんにもなくなっていて。正確に言うとな今のあの、残っている原爆ドームとかね。あれは、あったらうけど。そんな細かい事はあんまり覚えてなくて、とにかく一面全部、街が1つ壊滅。1発で、全部無くなったっていうのが、非常なショックだったですね。それは引揚げて、来てから、3日目ぐらいですかね。私は京都へ帰るので、[針生島の近くの駅から] 汽車に乗って——乗った駅は南風ヶ崎（はえのさき）って言ったかな。僕いつだったか行ったのですよ。関西勤務の時にね、引揚記念館があるっていうので行って、そうしたらやっぱりあの、DDT ぶっかける、あのこんなの……。

佐藤：機械が置いてあるのですか。

古海：そう、いっぱい置いてあってね。

これはびっくりしたのだけど[今は隣

が] なんとハウステンボスなんですね。まさに今風のレジャー施設、大レジャー施設の横が南風崎駅なんです。あの駅はもう廃駅なのかな。プラットホームが一応ありましたけどね。

大野：その駅は今でもありますけど、本当にもうただの田舎の駅ですね。

佐藤：引揚船で日本へ引揚げて来たときのことなんですけども、引揚船の中での食事や、あるいは上陸してからの食事には、どのようにお感じになりましたか。

古海：引揚船の中は、高粱が多かったですね。それで食べられない人が多かったですね。もともと酷い生活をして葫蘆島まで来て、胃腸も弱って足も弱っている人たちが多かったから、僕はちょっと食べましたけども、うちの母は体調崩してて食べられなくて。当時は日本も何にもない時代だったから。

佐藤：はい。であの上陸してからはいかがでしたか。

古海：上陸してからは全く記憶にないですね。記憶にないってことは、少しは良くなったんじゃないですか。

佐藤：次はやや抽象的な質問なんですけれども、帰国した後に引揚者としてなにかご苦労はありましたか。例えば、内地の人との関係についてです。

古海：私自身は引揚者ってことをよく言っていましたけれどもね。それによって特別違う境遇というか、違和感はなかったです。ただ、10何年前に引揚げ

60周年っていう集まりを九段会館で、善隣協会の主催でやったことがあって。そのときに、あのときはどうだったかというのを、代表で5人か6人くらいで、パネルと称して当時のことを思い出して話してもらったんです。



写真8 引揚げ60周年記念の集い  
(2006年)

それで寅さん映画の山田洋二さんとか、当時神保町の岩波ホールの支配人をしてた高野悦子さん、それから毎日新聞の論説員やっていた岩見隆夫さん。あと、なかにし礼さん。もう1人は善隣協会の理事をしていた藤原作弥さん、日銀の前の副総裁ですね。私は客席で聴いていました。みんな苦労した話で来るんだろうとずっと想定しながら、その座談会の準備をしたんです。それで共通の話題っていうのが1つだけあって、引揚げの方は苦労した人は苦労したって言っていました。岩見さんなんかは逆に、あの頃私は光り輝いていたなんて。子供だっ

たけれども、煙草を自分で巻いて作って、売って歩いてえらく儲けてね。小遣いは潤沢だし、あの時はわが生涯で一番輝いていたときだったなんて言われた。ただ共通の話題で、盛り上がったのが、みんな帰国してからいじめられたっていう点ですね。私はその記憶が全くなくて。その理由は今言った5人の人たちは、全員地方に帰ったんですね。私は最初、京都に帰ってそれから東京に来て、まあ大都会にいたからなのです。[言葉の面では]満洲は基本的に標準語ですからね。みんな言葉が違うから、いじめられるわけです。それから、着ているものがね。リュック1つで帰って来ているから、本当にボロボロです。要するに当時の引揚者っていうのは貧乏人の代名詞みたいなものだったから。それでお前は引揚者だろう、なんてっていじめられた、という話が盛り上がりましたね。俺もそうだとかね。あの当時は戦災者の人もたくさんいたし、よく町で見かけたのは傷痍軍人ですよ。それから戦災に遭ったという戦災者、それから疎開帰りとかね。今無くなった言葉がいっぱいある。その中の引揚者っていうのは、一段ちょっと低く見られていたように思えました。なんとなくちょっと違うという感じで。今でも、冗談にですが満洲の頃のクラス会では在日日本人の集まりだ、とか言っていますよ。

**(6)撫順戦犯管理所の父を訪問(1956年)**

佐藤：少し時代が飛んでしまうのですが、1956年に撫順戦犯管理所へ行った時のお話を伺いたいです。1つはですね、古海さんの回想録の中に、戦争犯罪への懺悔が教育刑であると中国側から言われたことや、面会家族の洗脳があったとマスコミが書いたという話に言及されていたと思います。戦犯管理所に行ったことによって、日本の戦争に対する古海さんの認識に変化はありましたか。あと、そのようなことを言われてどのようなことを感じられたのかということをお伺いたいです。

古海：戦犯管理所にはだいたい2週間行きました。瀋陽から撫順に通って、面会に行っていました。せっかく行ったのだから朝から晩まで一緒に話ができかというところではなくて。向こうには中国側の規則がありました。だから、1日だいたい2時間とかいうふうに決まっていたから。もうおしまいだから帰きなさいという時もあったし。かと思えば今日は特別に1時間余計にやってもいいよという時もありました。それから、瀋陽での軍事裁判の時の録画映像を見させられた日があって、面会家族全員で40人くらい。日本語で翻訳したものを観たのですが、3時間くらい聞かされると頭が痛くなってくるのですね。これは辛かったですね。

戦犯のほとんど軍人でした。大雑把に言うと30人が軍人、10人くらいは役人とか裁判官ですね。裁判官も極めて上級の人というわけでもなかったのです。どういう基準で捕まっているのだから分からないんだけど、例えば課長クラスや部長クラスくらいの方がいたりしたわけ。中央官僚の最高位は武部六蔵という元満洲国国务院総務長官でした。その方はその後亡くなりましたけれどね。



写真9 面会時の様子 (1956年)



写真10

面会時に行われたバレーボール  
(1956年)

佐藤：武部六蔵がなくなったのは撫順なのですか。

古海：撫順で重篤になって中国側が釈放しました。それで、日本に帰って1ヶ月くらいで亡くなってしまったのです。武部さんが総務長官の時に、うちの父親が次長でした。それから、高橋康順という人は参議府の参議。そんな人たちがいました。文官が10人くらいいましたけれども、どうしてソ連がそういう選り分け方をしたのか。軍人を含めて戦犯の引き渡しは中国が選り分けたというよりは、ソ連が選り分けたものだと思います。

それで、瀋陽での裁判の生々しいところを編集されたものを3時間聞かされたので、みんなくたびれ果ててね。それは、みんなショックを受けますよね。ある中将、すなわち師団長は部下が残虐行為をしたことが罪状になっていた。僕もショックを受けたけれども、とんでもないことをやっているわけですよ。人を並べて次々に突き刺していくとかね。そんな話ばかりを3時間くらい聞いて。でもそれは満洲で起きたことじゃないのですよ。というのは、瀋陽の軍事裁判というのは中国側が瀋陽で日本の戦犯を集めて、中華人民共和国として裁くということなんです。ただし、捕まっていたのはソ連から渡された人たちでした。それ以外の裁判というのは戦後すぐに中国のあちらこちらでBC級の軍事裁

判というのがありましたよね。ただし、それは蒋介石の中国なんですね。毛沢東の中国になってからは瀋陽だったのです。

なぜそういう人たちがいたかという、軍は昭和20年くらいによいよ本土防衛だということになって関東軍から相当引き抜いたのです。関東軍から引き抜いたのをまず朝鮮に持って行って、それから日本の本土に持って行ったので、関東軍はもうスカスカになっていたのです。それで、それを補充するというので、中国本土の支那派遣軍の方から師団にして4つか5つくらい、終戦直前くらいに持っていた。昭和20年5月に関東軍が守備範囲の変更をやったんです。それは日本の参謀本部と打ち合わせをしてね。満洲とソ連の国境って8000キロもあって、とても守り切れない。基本的には元々山型になっている国境をソ連に備えるように守ろうとしてたんですね。ところが、もうこんな8000キロなんて守ってられない。いくつか要塞があったところは別ですけども、守備ラインを下げてしまった。それで結局連京線のね、大連と新京、それから新京と図們、北朝鮮の国境を結ぶ線の内側、これを守ろうと言うことなんです。だから、この線の北側、満洲の3分の2か4分の3は、もう放棄するわけです。それを開拓団なんかにはそれを知らせないで。それは日本が

下がってしまうとソ連がすぐ入ってきてしまうわけだから。非常にけしからんと思うわけだけれども、開拓団にはいっさい知らせないで軍だけ下がってしまった。しかも最後に根こそぎ召集で5月から7月にかけて、開拓団の男4万人も兵隊にしてしまって、開拓団は女子供ばかりにされてしまった。

あと脱線ついでに言えば、新京で疎開列車で逃げる時にね、あれはまず関東軍の家族と満鉄の家族が逃げたわけですよ。それで、なんで市民を放っておくんだとこう言ったら、いや市民は荷造りに時間がかかるんだと。到底、駅にはすぐ集まれない。それで関東軍の家族というのは、命令一下すぐパツと集まれる。彼らは命令も情報もね、早く流すわけですよ。それで、僕は新京の駅で本当に見ていたんだけど、目の前をね。関東軍の家族を乗せた汽車がどんどん行くわけですね。次に列車が来た、次は誰だっていうと満鉄の家族専用車。それでね、一般市民は全くもって置いてけぼり。それはけしからん。しかも、関東軍の司令官の家族が終戦の時には日本にいたんですね。そういうこともあったし、それからもう1つは話が飛んでいますけれども。ソ連がいよいよ攻めてきたって時に関東軍はさっさと通化にうつったわけ。8月9日に移っているんですね。それで、満洲の政府に通化へ来

いて命令が来たわけですね。だけども、結果的には1人だけ、総務長官が行かなきゃ角が立つっていうんで、行ったんだけど。だけれども、市民はみんな残っているわけですよ。そして、北満からはどんどん避難民が来るわけでしょう。それなのにね、皇帝は行っちゃった。関東軍の司令部も向こうへ移して、満洲国の政府も移すと。それで、移って来る時の汽車輸送は、家族の分も含めて手配するって。それに政府が怒っちゃってね。そんな一般の市民を置いて、政府の家族だけ団体で逃げるなんてね。冗談じゃない。それよりも、それよりも政府が移っちゃったら、残りの市民と避難民を一体だれが面倒を見るんだとか。それで結局、うちの親父なんか結局最後まで新京に残っていたわけですけれども。途中で関東軍がウダウダ言うもんだから、角が立つっていうんで長官だけが行って。それで終戦の詔勅を聞いてすぐ帰ったわけです。まあそれはちょっと別としてですね。最後の段階で、5月くらいに関東軍がずっと引いた時に、満洲の一部だけを防衛するっていうんで、支那派遣軍から4~5個師団くらい来たんですよ。ところが、それがね。あっちこっちで変なことをやっているんですね。

佐藤：それは、中国戦線でということですか。

古海：ええ、中国戦線で。しかも、そこ

のなかに1人、藤田なんとかっていう師団長で中將の人がいますよね。これなんかは、兵隊を鍛えるためにね。中国の罪人をどっちみち罪人なんだって言って、殺してね。そうしてそれを訓練にしていましたね。そうして、それで度胸をつけなきゃいかんと。なんでだって言ったら、確かにそのころは日本で新しい師団を補充するのって言っても、もう優秀な兵隊はみんなないわけですよ。言うなればもうわけのわからない素人ばかりね。もっと言うと、もしかすると刑務所かなんかから刑の軽い奴は引き抜いたりしているのかもしれないし。そしてそれが渡って行って、しかももうそういう時期だから、中国に支那派遣軍として駐留していても怖いわけですよ。というの、こっちはどんどん手薄になってくるわけだし。いつゲリラが来て撃たれるかもわからない。疑心暗鬼になっているから、自分の怖さも手伝って、相当ひどいこともやっているわけですね。それがね、終戦の時は朝鮮軍にも補充で入っていたし、関東軍にもそういうのがまわってきていたわけですね。それが終戦の時に、ソ連が入ってきて無条件降伏をした時に、みんなソ連に行って、シベリアで捕まっていたんですね。それで、新生中国ができた時に中国として裁きたいから、日本の戦犯をこっちへまわしてくれと。そういうのが、確か中ソ友好条約かな。そ

れができたのが1950年ですよ。1949年が中国の建国でしょう。それで、その1950年に毛沢東がスターリンに申し入れて、ソ連が1000人ほど選んで。それで、その選び方が全く分からないのですね。というのは、中国にしてみれば特に満洲地域では、一番目を付けられているのは関東軍の司令官でしょう。それから参謀長、参謀副長。これが御三家っていうかトップスリーですよ。大將、中將、少將、これはね、ソ連は渡さなかった。それで、その他にもね、関東軍の参謀たちは全部俺の方で裁判をやるからと。関特演っていうのをやっていたんですね。関特演というのはドイツがこう西側から攻めて来た時に、場合によってはこっちから、西側からやろうと関東軍を増強して、ソ連の国境近くまで兵隊を持って行ったんですね。ソ連はそれを非常に根に持っていたというか、神経を使ってたんですね。それでそれを裁くって言ったんだけど、結局あのハバロフスク裁判っていうのをソ連はやったんですね。やったんですが、ところがさすがに関特演は言うなれば既遂じゃなくて未遂ですよ。だから、裁判では関特演自体どうも裁かれなかったみたい。それで、専ら石井部隊ですか、あの有名な細菌部隊。あれは本当にソ連が裁いちゃったんですね。その責任で、関東軍司令官以下、参謀長、参謀副長あたりが、20年の刑をソ

連から受けたんですね。だから、ソ連はそういうことを、関特演と細菌部隊のことですね。細菌部隊も満洲にいる中国人が怒るのはもっともだと思っただけでも、なんでソ連がその細菌部隊の裁判に出てきたかって言ったらそれはよくわからないんだけどね。もしかしたら、ノモンハンでは使っていないと思うんだけど、張鼓峰事件ね。ソ連と日本がドンパチやったっていうのは、ノモンハンと張鼓峰しかないわけだから。ノモンハンではないでしょうね。もし仮に使っていたとしても、張鼓峰なんでしょうけれども。それにしても、小さな極地的な問題で。けしからんのはソ連が20年の刑を関東軍司令官にやったんだけど、1956年に僕たちが中国へ会いに行った時、鳩山さんが行ってね、平和宣言が出たでしょう。あれの特赦でみんなさーっと帰ってきちゃったんですね。だから、それは中国にすると非常に心外だと思うんですね。

佐藤：先ほど3時間話を聞かされて頭痛かったとおっしゃったと思うんですけども、そういう向こう側の、そういう中国語側の、ある意味いろんなプログラムを用意して皆さんに彼らのそういう観念を宣伝してくるんですけど、そういうものを聞いて、何か古海さん自身の考えが変わったかとか、そういうことありましたか。

古海：考えが1つ変わったとしたら、日

本の軍人ってとんでもないことをやっていたという驚きですね。それは非常にショックだったね。ま、今となつてはそういうこと全部出てるし、一般に本にも書かれるけど。あれは1956年ですから、僕が大学を出た年で戦争中のことを振り返って研究するなんていうような余裕もムードでもなかったから、僕はあの、一回56年というのは社会人になってすぐですから、そういう点では誠に不勉強でね、何も知識ないという訳ですよ。だから、東京裁判というのあったし、特にあそこでやられた。東京裁判の被告であったのほとんどが軍人ですけど、その軍人も何かといたらほとんど満洲がらみの人ですよ。

ちなみに軍以外の人かというと、うちの父は総務庁の次長をやっていたけれども、もしかして悪くすると関東軍の首脳がいないから、そこも一緒に責任を負わされたのかなという感じはしない訳ではなかった。けれども、その時父親に聞いたし、その後起訴状だとかなんとか中国もそういうのどンドン発表しましたからね。『世界』だったかな、雑誌に出たりして、それを読んで、これにはもうまったく軍の関係の方は入っていない。満洲国の政府の方の問題での判決だというのがはっきりわかりましたし、そういう意味でも割り切っていました。



写真 11 帰途、興安丸船上での慰安会  
(1956年)

だから帰りの船の中でも、同行の記者がいや一大変だったですねっていうから、大変は大変だったけど中国の方でああいう裁きをする立場も分かる、なんてこといったら、あー古海さん洗脳されましたねって。そういうことじゃない、と説明したんだけど、日本に帰って新聞を見たら「面会家族、洗脳されて帰る」と。

佐藤：一部だけ切り取られてしまった訳ですね。

### (7) 父古海忠之の思い出

井田：お父様との思い出の文集を拝見させていただいて、中でも自分が興味をもったこととしては、お父様が拘留の関係で、18年間くらい離れていらっちゃって、18年も離れて暮らしていたにもかかわらず、例えばゴルフ一緒に行ったとか、大学通りの喫茶店白十字行った話とかも書かれていて、非常に仲が良いと思いました。自分が丁度 20 歳になったので、自分の父親と過ごし

た時間も 20 年になって、18 年間離れて暮らしていて、なぜそこまで仲が良いのかということ、また、他にも思い出等あれば、お聞かせ願いたいです。

古海：僕、中抜きなんですよ。満洲で生まれて、それが昭和 8 年で、終戦が昭和 20 年だから、12 年一緒に居て、僕は 1 人っ子で、そしてそれから父が 18 年居なくて、その間、母と私は引揚げてきて、私が学校を卒業して就職した翌年に縁があって、この国立に住み着きました。昭和 38 年に父親が帰ってきて死ぬまで、丁度 20 年ありました。

だけど、正確にいうと父が帰国したとき私はロンドンに居たし。その後も海外勤務があったから、一緒に住んだのは 15 年位でしたかね。それにしても、中抜きというのは、向こうも変だったと思いますよ。だって子供のときに別れ、次に会った時には、僕が所帯主になって、結婚もしてるし、子供もいるし、ギャップが凄い訳ですよ。だから、扱いに困った面もあったのかな。だけど、面白かったですよ。

佐藤：何が具体的に面白かったですか。

古海：やっぱり、親父というのは不思議なものだと思います。やっぱり、居た方が良くなって。でも一番苦労したのは母親ですよ。その父親の拘留とは比べ物にならないけれど。

佐藤：まさにこの家の中にお住まいになっていたのですか。



写真 12 撫順面会時の家族写真  
(1956年)



写真 13 古海夫妻の結婚式 (1960年)

古海：はい。お金借りて家を造って。何で食って行こうかと母親が考えて、一橋が近いから、学生さんの下宿をしたらどうだと言って、それが良かったんで

すよ。来たときはガスが無くて、水道が無くて、電気だけはきていたけれど。だから、水道は井戸ですよ。深く 20メートルくらい掘ってある。ガスはプロパンでした。そのような小さな家の 4 畳半に一橋の学生さんが入ってきてね。はじめ昭和 32 年頃は中田君っていう富山出身で剣道部のキャプテンやってた人でした。

あと、私の父は帰国してから、政治の場に自分も出る、と言い出して。やっと落ち着いた生活ができる、と思っていた母をがっかりさせました。政治家なんかやめてくださいって言われちゃって。それで、結局試すのは 1 回だけ、ということで母と折り合い、昭和 40 年の参議院選挙に全国区で立候補しました。池田首相や岸元首相などの応援をいただいていたけれど、結果はわずかなところで落選しました。

井出：そう書いてありましたね。

古海：ええ、それでもってね。父はこれをもって政治家になることをキッパリ諦めました。その後も政治家との付き合いは結構ありましたけれど。

佐藤：あと、お父様はどこかの会長か顧問か、なにかされておりましたよね。

古海：はじめはね。ホテルニューオータニの役職ですね。昔、大谷米太郎という人が居て相撲取りだったんですが、引退後いろいろ事業を興した。戦後のホテルニューオータニもそうですが、その前に鉄鋼業で成功して、大谷重工

業は満洲にまで進出していました。そういうご縁もあったのでしょうか。それで仕事ですが、ホテルの仕事は比較的短くて、東京卸売センターの設立や運営をやっていました。

佐藤：はい、名前は伺ったことがあります。

古海：TOC（ティーオーシー）っていうんですけれども。五反田にある大規模な卸売センターです。昔横山町とか馬喰町あたりの間屋がいっぱいあったところ。それが大規模な卸売り施設をつくらないと、横山町なんてトラックが入れない。コンピューターのハードやソフトも個々の間屋ではやりにくい。ですから、大きな建物をつくって、全部共通倉庫で。トラックが入れるようにして。それから、マテハンっていうんですかね。マテリアル・ハンドリングですね。自動的に作業をされるようにして。それから、経理も大きなコンピューターでぜんぶ管理する。やろうとしたのは日本で第1号なんですね。大きな投資ですから、当時の日本開発銀行の融資がいます。東京卸売センターの設立準備をやり副社長や社長になって、そうしたことをやっていました。あとは満洲の方の就職だとかなんかのお世話をするのが、老人の生きがいみたいになっていましたね。

佐藤：そうすると、よくこのご自宅には満洲の関係者の方がよく来られたのですか。

古海：大勢来られましたね。この家は建て直してからもう40年くらい経つんですが、むこうに我々が元々住んでいたところがあって、両親はそちのほうに。古くて狭い家だったけどお気に入りの家でした。それに両親は庭の木や草花や小鳥が好きで。そんなところにお客さんが来ていました。それに満洲の人たちの集まりはいろいろありました。国際善隣協会は父が関係していらしたので亡くなった時に、入ることになりました。岸さんとかうちの父だとかを囲むゴルフの会などもずいぶん長く続き、〔引揚者〕2世も参加していました。満洲帰りの方とのお付き合いは、父が帰ってきたおかげでひろまって、ずいぶん長く続いたと思います。

佐藤：お父様が1963年に帰国された後、お父様自身は引揚げてきた方の団体、引揚者団体には参加なさらなかったんですか。

古海：引揚者団体全国連合会というのがありました。昭和40年の選挙のときとか、引揚者への手当支給とか、そういう時には連繋があったと思いますが、私はその辺のことは知りませんが、ずっと後になって、10何年前に引揚げ60周年記念というのを善隣協会で行ったんですが、その時にちょっと調べていたら、その引揚者団体連合会というのが、社団法人として登記上はある。自民党の衛藤征士郎先生が会長だと

いうことも分かった。それで議員会館へ行って実はこういう企画を持っているんだけど、場合によっては共催でもいいですよ、と。そしたら、ずっと長い間、もう実体のない会になっている。どういうことかという、どうぞ私たちのことは気にしないで下さいと。会の当日は衛藤征士郎先生、来られましたけどね。60年というのは本当に長い年月なんだと改めて感じました。



写真 14

赤坂・霞会館での古海忠之氏帰国祝い  
(1963年)

佐藤：そうですね。なるほど。それで、お父様はその TOC で亡くなるまでお勤めだったんですか。

古海：いえ、私がロンドンに2度目の赴任をしたのが1977年、父が77歳の時でした。体力も少し落ちてきたようなので、もう充分働いたのだから、そろそろ辞めてゆっくりイギリスに遊びにいらっしゃいよ、と言いました。父

は、自分は向こうにいた何年間かは、〔働いた時間として〕カウントしないんだと言っていました（笑）。

佐藤：18年間をカウントしないんですね（笑）。

古海：精神的にはわかるんだけど、やっぱり肉体的にはね。それで、79歳のときに、私たち家族が住んでいたロンドンに両親で3週間くらい遊びに来ましてね。その時に確か仕事は辞めて来たんだと記憶しています。顧問もやめたんだっかな。まあ時代によって、親子関係っていうのも違ってくるものかと思いますが、生き別れになりそうな時とか、災害に遭った時とか、そういう極限状態を考えれば肉親の大事さが分かります。だから、やっぱり生きててまた会えたのは極めて良かったと思うし。

ただ、まああの判決自体はね、考えるとなかなか難しく。本当にその責任をなぜとられるんだっていう、そういうものもあるし。まあ、それを言い出すともうキリがない。だから、結局もう1つのセレモニーで、言うなれば侵略なら侵略ですっていうことで誰かの責任があったと。それで、その責任は誰かがとらなきゃいけないのだと。それをとるのが、関東軍なのか政府なのか、そういう議論をすると、100年論争というか、神学論争になってしまうから。

もうとにかく〔敗戦時に〕いた人が、

もっと言うなれば捕まった人が責任をとらされた。順番から言ったら、武部さんっていう上にいた人が病気で亡くなってしまいましたからね。それはもうしょうがないことだと思うんですけど。第一、父親自体がこれはもうはっきり言っているんですけど。これは誰かが責任をとらなくてはいけなくて、もっと横にひろげればこれは俺のところじゃなくて、むしろこっちの方だとか。それはもういっぱいあるわけです。それで、こっちの方の人っていうのは、まだ誰も捕まっていなかったから。まあもうそれは仕方ない。また、とろうと思えばとれるような線で書くとね。総務庁っていうところにみんな集まって来ているわけだから。それはもう最終責任ですから、全然その線を引いても、関係ないということではないわけなんです。だから、そこは非常に明るいですよ。あの、カラッとします。

佐藤：そういう話も帰国後になさっていたんですか。

古海：しました。それでね、実は僕もつと聞いておきたかったことが今になってね。10くらいあるんだけど。やっぱりよくないんだな。一緒にいると、いつまでも一緒にいるみたいな気になって。

佐藤：いつでも聞けるから、ということなんですよ。

古海：そうなんです。それは、半分はね。

満洲国の運営がどうだったか、ということだし。あと、半分は親類関係ですね。親類で、あの人とこの人が遠縁だけど、あれどう繋がっているんだっけとか、なんであの家と付き合いがあるんだっけ、とか。父の実家は京都でしたが、その前は米沢。上杉なんですね。明治維新のあと藩が月給くれなくなったから、大挙して米沢を脱出したんです。うちの父方の祖父っていうのは、米沢の中学から仙台の高等学校へ行って、大学は東京で、法学部をでて判事になったんですね。地方裁判所の判事、それが京都だったんですね。甘粕さんっていう人も米沢なんですね。いつだったかな。上杉謙信の大河ドラマをやっていた時にも甘粕って出てきました。あれは、家老格のお家なんですね。

佐藤：甘粕家ってそういう名門だったんですね。

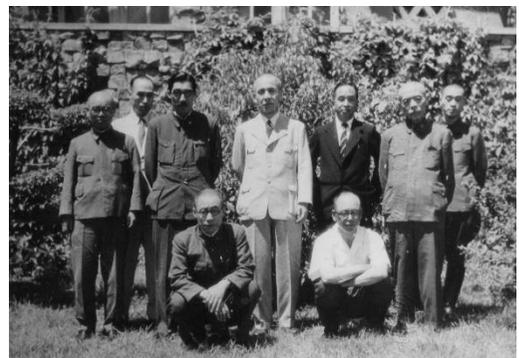


写真 15 満映湖西会館での集合写真  
(1945年)

古海：米沢藩、上杉の家臣ですよ。甘粕さんの長男の忠男さんという方が、去年亡くなりましたね。

佐藤：古海さんも交流があったんですか。

古海：ありました。あの人ね、三菱電機の副社長やっていて、仕事の上ではただの取引先の副社長という話なんだけど。あの甘粕さんが死ぬときに、ピストル取り上げたり青酸カリ取り上げたり、みんな取り上げて。ところが2つに分けて持っていたらしくて、その片方を飲んで亡くなったんですね。それを飲むんで、水を持ってこいって言われて、水を持って行ったのが一番若い秘書だったらしいけれども、その人が年をとってたけど、銀座でバーをやっていたんです。ずっと長いこと。甘粕さんはそのバーの常連でね、連れてってもらいました。彼は僕より2つか3つ上でした。昔大連で甘粕さんの家に行って、一緒に釣りに連れてってもらったこともありました。そのバーも一昨年無くなりました。満洲の話題になるようなところは、人も場所も含めて本当に少なくなりましたね。

#### (8) 満洲国について

佐藤：次の質問になります。大変に大きな問題なのですが、様々な経験をなさった古海さんにとって、満洲国とは何であったのか、それから、その歴史を学んで継承していく意味はどんな点にあるのかについてのお考え

を教えてください。

古海：当時から僕あまり考え変わってないんですけども、菅野君も経験したかもしれないけど、日本で満洲の話というのは非常にやりにくかったですね、ずっと。やりにくいというのは、私が若かった頃の日本人の満洲観というのは、もう何でも日本が悪かったよ、すべて悪いという人たちですな。それから自分たちが建設的なことをしたという人たちがいて、中間がいなかったんですよ。それで僕が中間みたいなことをいうとね。右よりの方からおまえはなんて左翼的なんだといわれ、左翼の方からは反動だといわれるような感じだった。建設的なことをやったのは事実だったと思うし、イギリス、フランス、オランダなどの植民地経営とは、十分違う建設的なものがあったと思う。だからといって、それが全部ということでは全くありません。それをいうと両方から叩かれて、座りがいい椅子がなかったけれども。近頃はね、非常に楽になったのはね。先生もそうかもしれませんが、固定観点からだけでないノンポリの学者さんというのが出てきた。

佐藤：はい、ノンポリかもしれません(笑)。

古海：いやいや、つまり先入観を持って、はじめから俺はこっちの陣営だと決めていない人たちがね。出てきたもんですから、随分話しやすくなった気がします。そういう意味でいうと、今日

本でやっぱりあれは侵略だったというのはもう通説ですよ。僕はね、それになんの異存もない。こう思ってるんです。つまり、満洲国というのは、まずその動機からいって、当時、昭和期の日本で言われていた満蒙問題を解決しようとしたものでした。それで柳条湖で鉄道を爆破して、中国側の仕業だということにして満洲全部の占領につながった訳です。条約上の権利というのは日本にありました。日露戦争により得たもの、袁世凱への21箇条の要求に基づくものなどです。ところがそれらは五四運動のあたりから危なくなってきた、権利だと思っていたものが侵害されてきた。張作霖までが反日になって迫害を強めてきた。それで現地にいる人たち、山口重次とか、小澤開作とかいう人たちは、行動を起こさない関東軍はなんて腰抜けだと、もう罵倒してる訳ですね。俺たちがこんなにいじめられてるのにちっとも助けてくれない。関東軍というのは俺たちを助けるために居るのではないのかとって怒ってる。日本に来てのぼりを立てて遊説して回ったりしてね。権利だと思っていたものがどんどん侵されてく、なんとか防がないといかんというニーズあった。これが1つ。それからソ連の問題があった。必ずまた満洲に出てくると思い込んでいましたからね。実際ソ連はしょっちゅうちょっかいを出したり居座ったりし

ていた。ですから満洲を固めておかないといつまたソ連が攻めてくるかわからない。日本を守るのが朝鮮で、朝鮮を守るのが満洲だというようにも考えられていた。その次は経済問題です。大不況下の日本経済を打開する方策は満蒙しかない、と思われていました。それから次に資源の問題。いざアメリカと戦争することとなれば——石原莞爾という人は最後の戦争は日本対アメリカだといってたけれども——日本は何も資源がない。ということになるとやっぱり満洲北支、さらに南洋を押さえるのが日本のニーズでした。ですから満洲事変はね、はっきりに日本のニーズにあった戦争でした。もう1つ、その後の満洲国の仕組みというのは、大雑把にいうと、関東軍がずっと後ろから目を光らしていたこと。そして、1つの省のトップが中国人でも満洲人でも、2番目のポストに日本人が入っていて、それで抑えられる仕組みを作ったとか、もっと詳しくいうと総務庁中心主義の制度とかね。そういう仕掛けをみてもね、満洲国はやっぱり傀儡国家だといわれても仕方がないと思います。その辺を争うつもりはありません。

ただ、私が以前から問題意識を持っていることがいくつかあります。満洲事変を起こしたとか、満洲国の仕掛けは、関東軍と日本の官僚が大事なところを握っていたということから、侵略

で傀儡政権の実質植民地ということになって、そこでおおかたの関心は止まってしまうのです。その先は日本が望む政策を好きなようにやっていたのだろう、論ずる迄もないと思っているのですね。それだと、ただ収奪の対象だったのだろうとかで、スペイン、ポルトガル、またイギリス、フランスなどの植民地と違うところがあったのかどうか分からないではないですか。

確かに満洲国 13 年の歴史の後半、日中戦争が泥沼に入ってしまった、更に太平洋戦争が始まってからというもの盟邦日本への協力が何にも増して大事なことになりました。そのため工業生産を高めるために無理をしたり、農産物の供出目標が引き上げられたりしたのです。その他にも、当時満洲で働いていた人たちに戦後聞いた記憶ですが、戦況の深刻化とともに関東軍の態度がピリピリ神経質になって来た——厳しくなったということです。ノモンハンでの関東軍の敗退が昭和 14 年。それから軍と皇帝の線で、建国神廟を建立して天照大神を祀る、なんてことをやったのが昭和 15、6 年でしたかね。あの辺からおかしくなったのではないのでしょうか。

満洲国の当初数年は治安対策と必要な制度作りに忙殺され、やっと離陸して理想に沿う国造りに努めて、手ごたえも得ていたけれども、結局戦争で

すべてが台無しになってしまった——これは満洲国の関係者、私の父親も含まれますが、とくに政府官僚だった人たちなどが述懐していましたね。その満洲国の、昭和 7 年の建国からの前半期、昭和 13、14 年までのところは、ですから満洲国の土台を固めて成長期にあったと云えるでしょう。

満洲国が侵略だったとか、傀儡国家だとか非難されるときに、そうでない要素も見て貰いたいという主張も出てきます。思うにそういうグループが 2 つあります。1 つは建国前から活躍していた満洲青年連盟や大雄峯会といった、いわば青年グループ。民族協和、五族協和の理想を唱えて国造りに挺身した人たちです。建国後の大同学院や建国大学にもこの思想が流れていました。情熱を傾け、ときに命を懸けて働いた純粋な人たちです。満洲が植民地というなら、他の植民地で宗主国の人たちからこういう動きがあったのか。ただこの人たちの主張はやや理想に走りすぎて現実問題の掘り下げに欠けたところがあったと思います。

もう 1 つは（もう昔のことになりますが）満洲で働いていた人たちの話をいろいろ聞いて感じたこと、また回想録などにも出てくる一種の達成感です。特に役人をやっていた人たちの意識に強い。何かというと、税制など財政制度の確立、乱れていた通貨制度

の統一、産業の振興、計画経済の採用、大規模なインフラ整備、鉄道網の拡充、雇用の拡大、郵便制度、教育制度等々です。そしてこうしたことを背景に国民の生活が良くなったという意識がある。与えられた条件の中で具体的な目標をもって達成に努力するのが官僚です。その努力をして一定の目標を達成したという満足感がある訳です。

その「与えられた条件」の中には満洲国に実質君臨していた関東軍との交渉も含まれます。関東軍と政府との関係は、ある特定の問題をどうするかといった場合に、議論を重ねて双方納得の結論に至ったこともよくあったし、一方では意見対立し、当時のことですから最終的には軍が強い。役人が憤然抗議して辞職するといったことも時には起きていました。

星野直樹という満洲国の総務長官を勤めた人の回想ですが、昭和7年に大蔵省を辞めて建国直後の満洲国政府に参加するグループが、時の大蔵大臣高橋是清に私邸での食事に招かれた。その時の高橋是清の言葉の1つに、「満洲は新しい国を造ろうとしている。その仕事を引受けに行く君たちは真に満洲のためを計ってやらなければならない。日本のことを考えるのは二の次だ」と言われたそうです。その言葉は、うちの親父の回想録にもあります。まあ現実にはいろいろ難しい問題があったことは当然ですが、理想の

国づくりに励むことがひいては日本のプラスにもなる、という考えは政府の中でかなり共有されていたと思います。少なくとも戦争の激化でジャパン・ファーストとならざるを得なくなるまではそうであったと思うのです。なればこそ関東軍との衝突もいろいろ起きていた。軍と同意見という場面ももちろんたくさんあった訳ですが。

脱線しますが、高橋是清という人は財界人としても、政治家としても偉大な常識人だったと思います。満洲については、元になっている信念があって、満洲行きのグループに敢えてそういう話をしたのでしょうね。満洲の関係では、彼は治外法権の早期撤廃を唱えていた。更に満蒙開拓団をあのような形で入植させることに強く反対していた。とくに開拓団反対は彼のアメリカ体験も影響していたのかもしれませんがね。あのころは中国移民への排斥運動がアメリカで盛んだったですからね。でも開拓移民に賛成していた軍部は嫌がりますよね。彼が二・二六で殺されたのは、満洲関係の理由ではなくて、軍部の予算を抑えようとしたとか、まあ常識路線が睨まれて「君側の奸」ということになってしまったのでしょうけど。それで高橋が殺されたら、もう反対者はいない。居ても口をつぐんでしまった。それですぐ満蒙開拓団の入植が始まったと理解しています。

話を戻すと、満洲国での政策決定などについて、関東軍と政府との間には緊張関係があったし、政府国務院が重要な行政や法案の決定を行う場合には、国務院会議を通さなければならない。出席者は部長(大臣)だったから、総務長官を除いてすべて満系です。それが通ると今度は参議府での審議だけど、出席者である参議は3分の2が満系です。この2つの会議で修正されたり、条件が付けられたりしたこともある。それを通過して皇帝の決済ということになる訳で、このプロセスでは相当緊張したと星野さんが回想録に記しています。戦争の激化とともに対日協力が全てに優先してゆく訳ですが、満洲国には理想追求の流れや時期もあったことをぜひ歴史の中に残して行ってほしいと思うのです。

それで、その先には日本の利害がもろに政策に出てくる時代が来る。それについて、環境に応じて日本のニーズがどう変わり、満洲国に何を期待するようになったか、対応して満洲側の政策や問題がどう処理されて行ったかと見て行くことが必要だと思います。日本は、支那事変が深まるにつれて、また米国との関係が悪化するにつれて、戦力増強の必要が益々高まり、武器・艦船・工業製品、についてはその原料への需要が急増しました。その結果は当然財政に及んで、太平洋戦争が始まる前から日本の財政は異常なほど

国債依存体質となっていました。そういう状況が当然圧力となって満洲国にもかかってきた。満洲でもっと何とかできないか。満洲国に頼もう、やらせようという訳です。満洲国の産業開発5か年計画は第1次の途中から修正修正を余儀なくされた。第2次計画はあってないようなものだったのではないですか。もっと沢山、それも直ぐに、という訳です。それで成果が上がった分野もあるけれども、強行するための混乱も起きたし、ネックもハッキリしたのではないですか。工業製品などは部品や原材料などの裾野が確りしていないと、頑張るだけではどうにもならない。満洲国は工業と言えるものが殆どないところから、産業に大投資をして立ち上げたけど、成立して5、6年でそういう時代に入ってしまった。だから負荷をかけてもネックが露呈するだけ、といったところが多かったらしい。満洲重工業総裁だった高崎さんの回顧録にその辺のことがよく書いてあります。満洲国の経営という面でいうと、そういう戦争のためのシフトは当然に民生を圧迫します。もともと満洲では生活のための軽工業品を外に頼ってきました。昔は華北から、満洲国成立後は日本からでした。それが不自由になったし、農産物の供出割り当ては増えるし、です。そうすると民衆の不満も増えるし、王道政治の理想はどこに行ったということになり

ます。

悪いことについて、自然の成り行きなのか、とくに太平洋戦争になってからはだんだん日本人のいらいらが目に付くようになって、現地中国人との関係が心配されるようになったという。これも何人もの人の回顧録に出てきます。神社の前で頭を下げなかった満人を日本人が殴ったなどです。満洲国では宗教は自由だった。日本人は仏教か神道、中国人は道教など、蒙古人はラマ教。勿論キリスト教会もありました。でもそうなる五族協和どころではありません。宗教関係の悪政は、1941年だったか、満洲に建国神廟というのが創られました。皇帝溥儀が訪日した際に、日本に頼んで天照大神を祀る神社を満洲にも建てることに

した。そして拝礼することを全国民に求めたというものです。政府が、それはまずいと棚上げしたものを、皇帝が自分も日本の天皇の權威をまとうために無理に頼んだという説明が多いのですが、宮内府の処長（局長）だった人の回顧録に、関東軍がその必要性について時間をかけて皇帝に吹き込んだことが詳しくでています。大体、関東軍がもし反対ならば国務院会議や参議府会議を通す筈がない。天照大神が頂点の国家神道、その八紘一宇思想で東亜を纏めるのは陸軍の基本的な考えでしたから。まあちょっと脱線しましたが、戦争が満洲国運営の方向転換を迫ったという視点もぜひぜひ歴史研究に入れるべきだと私は思っています。